

資料3

2017年度  
『学校ボランティア通信』  
(横浜キャンパス)

2018年2月17日 発行

# ボランティア通信

松本中学校

栗田谷中学校

六角橋中学校

川崎市立中学校

平塚市立中原中学校

戸塚高校定時制

小学校外国語活動

青少年の居場所

JIN-KANA 学習塾

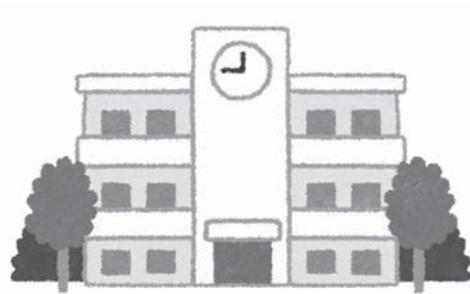


2018年2月17日

# 松本中学校

## 目次

<b>コミュニケーションの大切さ</b> 法律学科 2年 和田 真由子
<b>理想を行動に</b> 人間科学科 3年 増澤 一登
<b>授業運営の難しさ</b> 英語英文学科 4年 今井 翔太
<b>理想のクラス</b> 英語英文学科 4年 原 亜由美



## コミュニケーションの大切さ

### 法律学科 2年 和田真由子

今年の2月から毎週水曜日に松本中学校で社会科のATとして活動させていただいています。10ヵ月がたち、最近の活動では毎回自分の成長を感じられるようになりました。そして、生徒に「先生」と認知してもらっている事、呼ばれることに喜びを感じています。活動を通して学んだことは数多くありますが、1番大切な事だと身に染みて実感していることは「コミュニケーションの大切さ」です。

ATの主な活動内容は授業中に生徒のサポートをしたり、私語の注意をしたりすることですが、これらをするためには生徒との間に信頼関係が構築出来ていることが必要不可欠です。よく知らない人にいろいろ言われることは誰も嫌です。それは先生と生徒という関係であっても変わらないことです。その認識が活動を始めたころの私は欠如していました。意識を変えるきっかけになった出来事は卒業式の予行演習です。当時の2年生が全体的にざわざわしていたので思い切って注意したのですが、笑われてしまって逆にさらにうさくなってしまいました。このことを副校長先生に相談したところ、それは生徒との間に信頼関係ができていないからだという趣旨のアドバイスをいただきました。このとき私は、自分はATの1人としてではなく、1人の人間として生徒から見られていることに気づかされました。心のどこかで「生徒はATという存在があるなかで学校生活を過ごしているのだから私にだってすぐに寄ってきてくれるだろう」という思いがありました。それ以降の活動はこの認識は大間違いであることを肝に銘じて行うようになりました。人と人が信頼関

係を築くためには相手の事をよく知ることが必要です。そのためにはコミュニケーションをとることが必要あり、当たりまえのことながらとても大切な事です。

まず、意識的に変えたことは10分休憩の過ごし方です。それまでは次に参加する教室の廊下で待っていました。活動を始めたばかりのころは教室に入るのをためらっていましたが、それをやめて生徒との会話をする時間に変えました。そのクラスの前の授業のこと、今社会科は何をしているのか、生徒が取り組んでいる課題のこと、職業体験などの校外学習のことだけではなく、「今日は寒いねえ」なんて他愛もない会話もありました。そうしているうちに「あ、次社会か!」「先生こんにちは」などと声をかけてもらえたり、朝の挨拶運動の時に手を振ってくれたり、授業後に私の事を追いかけて話をしにきてくれたりするようになりました。しかし、それはごく最近の事であり、信頼関係を築くには長い時間が必要だということです。活動が週に1回のためこれは仕方ない事です。そして、まだまだ信頼関係を築いている途中です。たくさんの会話を生徒と交わしながら「私」という人間を知ってもらえるように、また、生徒の事を知れるようにコミュニケーションをとっていきましょうと思います。

活動をしていると「生徒との関係はこのように感じて良いのだろうか。友達になってしまわないか。」と考えることがあります。今でもはっきりとした結論は出ていませんが、現在はそれでも良いと考えています。自分はATです。先生方よりも近い存在の先生。ATはそんな存在だと私は考えています。これからの活動も試行錯誤しながらの活動になると思いますが、自分なりのAT像を探しながら、また、この活動をさせて頂いていることに対する感謝を忘れず活動に精進していきます。

## 理想を行動に

### 人間科学科3年 増澤一登

私は、学校ボランティアを通じて、生徒とのコミュニケーションを大切にしようと強く思いました。私は今まで自分が考えてきた理想の教師像の一つとして、生徒と向き合うことを挙げていました。この理想を理想に留めることなく、行動に移さなくてはならないと感じました。その理由として、実際の現場で働く先生方の姿を見たことと、私自身が生徒たちと関わって感じたことがあったからです。

まずは、実際の現場で働く先生方の姿を見たことです。授業中には、広い視野を持って生徒たちの反応を見逃さない。その反応に対してのリアクションも丁寧になさっていました。先生も忙しいのだろうけど、授業と授業の間には多くの生徒とコミュニケーションを取っていました。そのときは、笑っていたり和やかだったり、生徒が安心できるような表情だったのが印象的です。もちろん、指導をするときは、厳しい表情で注意する場面もありました。その指導の際に、笑いかけながら生徒の行いを注意したこともありました。そのときの場面、状況に応じて指摘の仕方を変えていました。正直なところ私は、指導をするときはきちんと言うべきだと思っていました。それに私自身がそういう指導を受けてきました。しかし、現代の生徒たちには、場面や状況に応じて指摘の仕方を変える必要があるのだろうと思いました。また、その場面や状況に応じた行動をするためにも、生徒のことを理解しなくてはいけないと感じました。

次に、私自身が生徒たちと関わって感じたことがあります。私は、学校ボランティアで最初に関わった生徒が、馴れ馴れしい言葉づかいで話しかけてきたとき、衝撃を覚えました。私の出身の中学校では、仲良くしても馴れ馴れしい言葉づかいの生徒は少なかったので余計に衝撃でした。しかし、ボランティアを繰り返していく中で、こういったコミュニケー

ションの形もあるのだと感じました。電子機器が発達し、面と向かって会話をする機会が少なくなっています。そんな中、生徒の上に立とうと思ったら、生徒との関係はうまくいかないかもしれません。生徒と同じ目線に立って会話をするのが、生徒の心の扉を開ける一つの方法なのだと感じました。また、授業中にあまりにも態度が悪い生徒がいたので、思い切って注意したことがありました。注意した生徒から返ってきた反応は、すごく反抗的なものでした。しかし、よく考えてみると、知らない人から突然注意されている気分なわけがない。この自分の行動が、生徒と信頼関係を築くことが必要だと強く思うきっかけになりました。

私が理想としてきた、生徒と向き合うことは教師になったら絶対にやらなくてはいけないことの一つなのだと気づきました。教師と生徒が良い関係を築くためには必要不可欠なことです。逆に、生徒と向き合うことを理想としてきたことは、間違いではなかったことにも気づけました。今後は、もっと先のことを見据えた自分の理想の教師像を探していきたいです。

## 授業運営の難しさ

### 英語英文学科4年 今井翔太

齋藤先生の紹介で松本中学校にてボランティア活動を始めて約10ヶ月が経過した。教育実習、採用試験、体調不良が続いてしまっているため活動を行えていないが、教育実習前までの経験を基にこのレポート書かせていただきたい。

松本中学校では、様々な生徒と触れ合う機会を与えていただいた。物静かな生徒、やんちゃな生徒、障害を抱える生徒など個性の強い生徒たちと触れ合うことで様々な考え方や生徒との接し方について学ぶことができた。その中でも、私が一番考えさせられたのは、個性の強い生徒が集まると授業運営の難しさが増してしまうということだ。もちろん、個性強い生徒が集まっていることに関して問題や不平はないが、教師の授業運営の腕が試されると思った。

生徒を上手くひきつけて、授業に集中させる。単純に思えるこの行動1つでもたくさんの難しさが存在している。私は教室の後ろに立って生徒の活動を補助したり、学習活動中に机間指導をすることを主な活動としていたが、40人の生徒を1つのことに取り組ませる難しさをひしひしと感じていた。教室の後ろからは全体を見通すことができるため、生徒が上手に手を抜いているところがよくみえた。しかし、先生は授業を進めなければならないため、一人ひとりに注意して回することは決して簡単には出来ない。私も後ろから、授業の邪魔にならない程度で注意をして回るが焼け石に水状態で1分後には元に戻ってしまう。

後に先生方の話を聞いてみても、授業運営には葛藤を抱えていらっしやるとのことで、経験のある先生方でもそのような状態になってしまうこともあり私が教壇に立つことを想像すると恐怖すら感じる。解決方法は学校、学級ごとに異なると思うが、自身の指導力を高めることの必要性を強く感じた。根本的に解決するために地道に指導力を高めることで1人でも多くの生徒を授業に集中させることを意識しようと思った。小学校ボランティアとは違い、規模の大きい中学校ならではの授業運営の難しさを実際に体験し、考える機会を与えてくれたことはとても大きな財産であり、これから教壇に立つ上で重要なものになるだろう。そして、まだまだたくさんのことを学んでいきたいと考えている。



## 理想のクラス

### 英語英文学科4年 原亜由美

今年の11月上旬に六角橋中学校のアシスタントティーチャーとして個別支援級の合同宿泊行事に参加させていただきました。宿泊行事も個別支援級に入ることも初めてで、緊張しましたが、とても良い経験をさせていただきました。以前、横浜市の教師塾アイカレッジで「個別支援級のクラス運営は一般級のクラス運営の鏡です。」と言われました。一人ひとりのニーズに対応し、生徒自身が「個別支援級にはさまざまな能力や特性をもった子がいるからお互いを助け合おう。」という気持ちでいられるのだと聞きました。実際に宿泊行事に参加した際に、生徒たちもこの言葉を口にしていました。また、先生が生徒に「〇〇くんをひっぱってあげてね。」という声掛けをし、その生徒が先導していくシーンをよく見かけました。この時には、アイカレッジで学んだことと同じで、自分も「お互いを助け合って、補い合うクラスにしたい」と思いました。しかし、よく見てみると、生徒の発言の中に少し気になる発言が目立ちました。手を洗う際に、ハンカチを落としてしまった生徒に対して、他の生徒が「もう、しょうがないな。私が持っていてあげるから、早く手を洗っちゃいなさい。」と言った時です。この時に、ここにいる子どもたちの中には、普段からそのような声をかけられながら生活している子が多いのだと思いました。また、そのような発言が続くことで、生徒の中に「できる」「できない」が生まれてしまうのではないかと感じました。「できる生徒」はいつもお姉さん口調になってしまい、「できない生徒」はいつも他の生徒に頼ってしまうのではないかと感じました。単に「個別支援級の学級経営を見習いましょう」というのではなく、きちんといい点、考慮しなければならない点を理解しなければなりません。

合同宿泊行事をきっかけに、松本中学校でも8組に入らせていただくことができました。生徒たちとバドミントンをしたときに、3年生の女子生徒がとてもうれしそうにしているシーンが印象に残りました。全学年でバドミントンを行う中で、

各学年から個別で練習する生徒が出てきました。その中で、2年生と3年生の生徒とラリーを行いました。その時、3年生の生徒がとても上手にシャトルを打つ場面が多々ありました。その場面を見た、先生が「さすが〇〇さん、3年生だね。とても上手だね。」「1年生の時から3年間とても上手になったね。たくさん練習したもんね。」と声をかけられていました。その時の女子生徒の笑顔がとても嬉しそうでした。その生徒の能力を褒めることも大切だと思います。それと共に、その生徒の頑張りやその子の成長を認識し、認めることも大切だと思います。

個別支援級の行事に参加することで、今までに考えたことのない視点で考えることができました。来年からどんな環境にいても、教員生活に生かしていきたいと思っています。



# 栗田谷中学校



## 目次

学んだことをどのように生かすか	英語英文学科 4年 岡崎 玲奈
「指導を学ぶ」ことから「子どもを見る」ことへ	英語英文学科 4年 貝原 光太郎
気づき	法律学科 3年 井倉 真昼
新しい気付き	人間科学科 3年 岡本 大希
後期ボランティア活動の振り返り	人間科学科 3年 寺西 政裕
生徒との関わり方を通して学んだこと	経済学科 2年 長浜 詩菜
生徒との関わりを通して	人間科学科 2年 原 雪乃

## 学んだことをどのように生かすか

### 英語英文学科 4年 岡崎玲奈

栗田谷中学校でのアシスタント・ティーチャー(以下:AT)の活動では、毎回多様な学びを得ることができました。生徒とのかかわり方においては、「あの時はこういう返答をしたほうが最適だったかもしれない」「もう少しわかりやすいヒントを出せば自力で答えにたどり着けたかもしれない」などと自身の言動について反省することが多くあります。しかし、どんなに反省する点が多くても、活動が終わるといつも「また来週行くのが楽しみだな」と感じられます。それは先生方が親切であることもそうですが、何より生徒が可愛く、愛しいと思える存在だからです。生徒と他愛もない話をしたり、自分の手助けによって生徒が問題を解けたりするとやりがいを感じられます。ATの活動は週に一度中学校へ行くだけであり、教員という職業の楽しい部分しか見えていないということもあるかもしれませんが、これから先どんな苦労があるとしても教員になりたいと思えたのは、やはり生徒の存在が大きいです。ATの活動で学んだことは数えきれないほどあります。これからはこのボランティア経験をどう生かしていくかが重要だと思うので、今後意識していくことを2点挙げたいと思います。

まず、すべての生徒に平等に関わることです。これは教育実習中にも指導教諭の先生から助言をいただいていたことであり、ATの活動において気をつけたいと感じていたことでもあります。目立つ生徒に目がいってしまいがちだけれど、普段口数の少ない生徒や自分から話しかけてこない生徒の方が実は支援を必要としているかもしれません。ATとして活動していてもまだまだ十分に関わっていない生徒がいるため、残りの時間もより多くの生徒と関わり、名前を覚え、生徒のことを知っていきたく感じます。

次に、生徒の気持ちを考え、相手の立場に立って関わっていくことです。ATの活動のある日、一人の生徒が遅刻してきました。いつもは遅刻をするような生徒ではないため、今朝何かあったのかと尋ねる

と、「朝読書の時間があると思って、読書が終わる頃を見計らってきた」と答えました。その日は朝読書の時間はなかったため結果として社会の授業に途中参加する形になったのですが、その生徒はプリントやノートを持っていませんでした。板書をとることを諦めて寝ようとしていたので、私が持っていたルーブリーフを渡し、「これに書く？」と言うと、無言でうなずき、黙々と書き始めました。その後も少し様子を見ながら、文字を書く手が止まったら「ここも大事だよ」と言って続きを書くことを促したり、「ここまでよく書けたね」と声をかけたりしました。遅刻してきたことは良くないけれど、ATとして私ができることは精一杯その生徒に寄り添って、相手が必要とする支援をすることだと改めて感じた日でした。

ATとして現場に立たせていただいたことは本当に貴重な経験であり、これまでに学んだ多くのことを忘れずに、4月以降現場に出たときに生かしていきたいと感じています。そして、これからも生徒のちょっとした言動にクスッと笑える心の余裕を持っていきたいです。

## 「指導を学ぶ」ことから「子どもを見る」ことへ

### 英語英文学科4年 貝原光太郎

栗田谷中学校でATとして活動を始めてからもうすぐ一年を迎える。子どもたちの名前や各学級の雰囲気にも慣れてきて、子どもたちからも「貝原先生！」と声をかけられるようになった。前期の活動では英語科の杉田先生の授業から教授法や文法指導のアプローチ、学級経営を学ぶことを心掛けて活動に臨んだ。とはいえ活動を振り返ると教室のうしろに立ち、先生の動きや指導法を追うことに精一杯であった。同じくATとして活動している仲間の学生たちの話などから「もっとATだからこそ子どもたちとの関わりを意識しなければ！」と感じた。今期からは具体的な目標を設定し、「指導者の声掛けと、それに対する生徒の反応」を意識して活動した。さらにそこから学んだ子どもたちへの声掛けを意識して活動の範囲を1~3年生、さらに個別支援級に広げ多くの生徒と関わった。

英語の授業のサポートをさせてもらう中で、活動

のモデルを演示したり、Teacher Talkに参加したり、子どもたちと一緒にflexible-pair-workなどの活動に参加する機会が多くある。そういった機会に子どもたちの前に出ることで子どもたちの表情がはっきりと見る事ができた。先生の指示にうなずいている子ども、ちょっと首をかしげている子ども、中には下を向いて「指名されたらどうしよう。」と不安な表情をしているような様々な表情である。私はそのことに気づいたところで、英語以外の授業や学級活動などでなるべく教室の前側に立ち、先生が声掛けや指示だしを行っている際の子どもたちの表情や反応に着目してみた。そこでATとして困っているような子どもやつまづいている子どもを見つけ、ヒントを出すなど答えにアプローチする支援を行おうと実践した。実際に支援を行うなかで子どもたちが何を理解できていないのか、どこまでは理解しているのかを判断して適切なサポートを行うことの難しさを痛感した。英語の授業の中の自己表現活動で生徒が文法事項でつまづいているかと思って私が文法的なヒントを出していると、自分の考えていることを「ことば」としてどう表現していいかわからないという、子どものつまづきと私の支援にずれ違いが生じたことが実際にあった。

活動が今期の終盤に差し掛かり、ひとつだけ成果を上げることができた。いつも活動に遅れをとっている男の子がいる。私は以前からその生徒を気にかけており、ある日授業中に支援を行っていると、「Any volunteers?」と先生が発言を募る場面があった。私は「ここだよ！」と思い、その子に「ここだよ！答えられるじゃん！いけいけ！助けてあげるから！」と発言を促した。すると「えー。んー、じゃあ。」と手を挙げ発言をすることができた。発言を終えると自分の役割を終えたようにホッと安心した様子でいたので、「すごいじゃん！やったね！」と背中をポンと叩くと、少し照れた様子で「ありがとう。」と言った。私は自分のことのように嬉しかった。

今期の活動では生徒をみることを意識し、終わりにやっひとつだけ成果を上げることができた。これは私の指導力や観察力の不足であると感じているが、学校現場で子どもたちが理解できないまま指導者がそれに気づけずに、子どもたちが「わからない。」

と不安のサイクルに陥ってしまったり、精神的な不安を抱えていることのサインに気づけないことは珍しいことではないのかもしれない。今後の活動を通して引き続き生徒をきちんと見て、観察力や子どもたちが前向きになれる声掛けを行っていききたい。また、ATとしてできること、ATだからこそこできる子どもたちとの関わり方を模索し、「信頼される指導者」とは何か、「寄り添う」とはどういうことなのかを見つけていけるような充実した活動を行っていききたい。

## 気づき

### 法律学科3年 井倉真屋

私が、栗田谷中学校でアシスタントティーチャーとしてお世話になり始めてから2年が過ぎ、このボランティア通信を書かさせていただくのも3度目となりました。私が栗田谷中学校で活動し始めた当時、小学生のように騒いでいた中学1年生の生徒が、もう3年生となり、自分の進路について考え、高校受験との戦いに奮起しています。週に一度の活動ではあっても、生徒の成長の速さを感じると共に、自分自身の教育への考えや行動に、とても良い影響を受けられ、定期的に何かに気づくことができる「気づき」を得られています。

昨年度は、『先生の前でしっかりしなければいけない』『補助しなければならぬ』といった考えから、机間巡視にとらわれるばかりでした。そして、机間巡視では、居眠りをしていたり、周りの友達とお喋りをしていたりなどの生徒がよく目に入ります。ある時、「先生はなんでいつも俺ばかりなの？」という、私に対しての一言から、いつも自分は無意識に同じ生徒ばかりに目がいつまでもついてしまっているということを学びました。このことから、昨年度のボランティア通信では、私は特定の生徒を見ることに集中し、全体に目がいついていないため、全体を見ることを目標に、これからの活動をしていきたい旨を書かせていただきました。

今年度は、上記の反省をいかすため、クラスの朝の会でも、授業中でも、休み時間でも、全体を意識して見ることを目標に活動してきました。9月、特にこの目標が達成されたと感じられることがありました。いつも朝の会に入る1年生のクラスで、後学

期の係決めの活動をしている時のことでした。流れは、まず先生が司会として学級委員を決めてから、その決まった学級委員が、そこからの残りの係を決めるかたちでした。女子の学級委員は、前学期にも学級委員を務めていた生徒が立候補し、すぐに決めることができましたが、男子は30分経過してもなかなか決まることはなく、その間担任の先生もずっと黙っていらっしやいました。私も、担任の先生の方針に従った方がいいと思い、黙ってクラスを見ていましたが、クラス中がもう学級委員の話題とは別の話をし始めたり、集中力が切れたりしてきました。その時、1人の男子生徒が周辺2、3人の男子に「この中でじゃんけんをして負けたヤツがやろうぜ」と誘いをかけているのが見えました。もちろん、その誘いに乗り気の男子はいなく、クラスが騒がれている状況がずっと続くばかりです。その時、私が、周りに誘いをかけていた男子生徒に「正直、学級委員やってみない？」とそっと声を掛けると、「う〜ん。でも、何をすればいいかわからない〜」と心の内を打ち明けてくれました。私は、「やってみない気持ちが大切だよ。何をすればいいかわからないのは、初めてのことでだから当たり前だよ！」と言うと、男子生徒は「やってみようかな！」と言い、騒がれている教室の中で「俺やります！」と言って手を挙げました。この経験から、彼の勇気に私は嬉しく感じました。

アシスタントティーチャーは、騒がしい生徒、集中していない生徒を注意するだけの役目ではないと考えています。クラス全体を見て、今自分が見るべき生徒を発見して、サポートをすることも大切であると気づきました。私は、来年度に教育実習を控えています。授業を行うにしても、全体を見るということはとても重要になってくると思います。これからも、アシスタントティーチャーの活動を続ける限り、様々な「気づき」を集めていき、より良い教員になるための糧としていきたいです。



## 新しい気付き

### 人間科学科3年 岡本大希

ATとして活動を始めて2年になりますが、1年を通してなかなか活動に身が入らない中だるみの時期がありました。慣れてきてマンネリ化してきたことも関係していると思います。ですが、ある出来事をきっかけに「まだまだ学べることはたくさんあるな」ということに気付けるようになりました。そのきっかけとなったのは、10月に開催された活動先での「現職の先生と語ろうの会」に参加したことです。この会では、教員の世界に入ったばかりの若い先生方と、普段どのように生徒と関わっているか、日頃思っていることを自由に話し合うというものでした。今年はタイムテーブル形式で一人の先生と深い話をすることができました。生徒との距離感や指導で注意していること、教員として大事にしていることなど、短い間でしたが多くのことを学べた貴重な時間でした。

そのかきもあってか、日頃のATの活動でも先生方とコミュニケーションを取りながら先生方の工夫や生徒との関わり方について多くのことを学ぶことができました。その中でも、一番印象に残っているのは「声掛けの工夫」です。

今年から数学の時間だけ個別支援級を見に行っているのですが、やればできるのに自分からほとんどやらない生徒がいました。最初は、その生徒が「眠いからやりたくない」というのに対し、「もう少しでお昼だし頑張ろうよ」とワークをするよう促していましたが、「面倒くさい」の一点張りなかなかやる気を出してくれませんでした。

そこで、最初からワークをやるよう促すのではなく、生徒が「眠いからやりたくない」と言った際には、「どうしたの？昨日夜更かしでもしたの？」というように生徒の話を聞くことから始めました。そこから、「んじゃ、2問だけやったら先生丸付けするからがんばろ！」と言って他の生徒のところに行くようにしました。少し経って、その生徒の近くに行くと「先生やったから丸付けて」と言われ少し勉強に対しやる気を持つようになりました。その後も、「いいじゃん！次こっちもやろう」と言うと、生徒は「仕方ないな」という感じで少しずつ続けるよう

になり、以前まで授業の途中で集中力が切れて消しゴムなどで遊んでしまっていたのですが、その時間はチャイムが鳴るまで数学のワークを続けてくれました。

この時、正直にとっても嬉しかったです。声掛けの仕方を少し変えるだけで生徒がやる気を出してくれたのは嬉しかったです。この生徒と関わる上で一番大切なのは「信頼関係」だなということを再認識することができました。今後の活動では、生徒と良好な信頼関係を結ぶにはどうしたらよいか、現場の先生の動きをよく観察しながら学んでいきたいです。



### 後期ボランティア活動の振り返り

### 人間科学科3年 寺西政裕

前期から活動を始めた栗田谷中学校でのアシスタントティーチャーも、後期に入ってから以前のように緊張することも少なくなり、むしろ学校へ行くことが一週間の楽しみになっています。前期と大きく変わったことは生徒たちの様子や授業内容などを客観的に見られるようになったことです。

生徒一人一人と関わる機会が増え、だんだんと生徒の顔と名前も一致するようになり、性格や特長も把握できるようになりました。生徒一人一人の個性が見えてくると、それぞれに合わせた指導の仕方や関わり方ができるようになり、コミュニケーションの幅も広がったように感じます。特に、特別支援学級では障がいの程度や学習の進度も大きく異なるため、「伝え方」には十分な配慮が必要です。一つのこと集中していたり、自分の世界に入っていると、突然話しかけても聞いていなかったりする時があります。そのため、まず名前を呼んでから話し始めることを日頃から心がけるようにしています。名前を呼ぶことで、自分の方を向いて話を聞くようになり会

話もスムーズになりました。また、特別支援学級の生徒はとて人懐っこい生徒が多いので、机間巡視をしているとよく呼びとめられることがあります。しかし、先生をすぐ呼び、自分で考えるという作業をやめてしまう生徒や授業と関係のない話を始める生徒もおり、机間巡視がかえって生徒の集中力の妨げになっていると感じる時があります。生徒に呼び止められても、あえて聞こえないふりをしたり、アイコンタクトだけで生徒の近くには行かなかったりするなども生徒との関わり方として一つの方法だと感じました。

授業も客観的に捉えることができるようになり、教材研究の大切さを日々実感しています。どの先生方も生徒が意欲的に取り組めるような授業を展開しており、私も一緒になって授業に楽しんで参加している場面もよくあります。特に、アクティブラーニングを取り入れた授業は参考すべきポイントが多く含まれており、班になって一つの課題に取り組む授業風景は、クラスに活気が生まれ、生徒同士の関わり合いが自然と生まれているように感じました。一方で、自分がもし生徒の前で授業をするならどのように教えるだろうと考えることも多くなりました。例えば、創作ダンスの授業では、各チームによって完成度に大きな差が見受けられました。このような事態を防ぐために、ダンス経験者やリーダーシップがある生徒をクラスメイトの投票により選出し、各チームに振り分けたり、創作ダンスに取り組む前に、生徒たちが取り入れられそうな基本的なステップやフォーメーションを教えたりすることが必要だと考えました。

## 生徒との関わり方を通して学んだこと

### 経済学科2年 長浜詩菜

栗田谷中学校でアシスタントティーチャーのボランティアを始めてから10月で1年が経ちました。1年以上の活動を通して昨年度と自分自身の生徒との関わりの中で変化したと思うことについて記していきます。

昨年度の活動はボランティアを始めたばかりということもあり、生徒との関わり方に戸惑い、授業中に声をかけるのは毎回同じ生徒であったり、机間指

導をするタイミングをなかなか掴めなかったりともどかしいものでした。

そこで今年度意識したのは黒板の板書を写していない生徒にただ書こうというだけでなく、黒板のどこに書いてある部分をノートに書こうと言ったり、ノートに書けていたら褒めたりするということです。その中で見えてきたのは、普段ノートを書いていなくて一見やる気のなさそうに見える生徒でも、側に行って話していると、「どうしてこうなるの？」と質問してくることもあり、決して授業に興味がないだけではないということです。実際には何十人も生徒に対して先生は1人だけであり、生徒一人ひとりが実は持っている疑問に気づくことは難しいと思います。ATだからできることなのではないかと思いました。

次に今年度の活動を通して学んだことは生徒との関わりについてです。今年度の活動では、ノートを取っていない生徒や授業中に居眠りしている生徒に声をかけるだけでなく、その周辺にいる生徒にも「ノートよく書けてるね！」と声をかけたりや班活動の時は班員全員が何をしているのか見て回るようにしました。そうすることで、クラス全体と関わることででき休み時間には生徒から声をかけてくることも増えました。

今年度の活動を通して生徒と関わっていく中で大切なことは声のかけ方一つにしても工夫をすること、気になる生徒だけでなく生徒一人ひとりに声をかけることで生徒も心を開くということに気がつくことができました。来年度は先生の行動を意識しつつ、どのクラスに行っても同じように活動できるようになりたいです。



## 生徒との関わりを通して

### 人間科学科2年 原雪乃

私は、2017年9月から栗田谷中学校のATとして活動させていただいています。活動を始めてまだ間もないですが、子どもたちや先生方との関わり合いを通して、日々様々なことを学んでいます。

私がATを始めた理由は2つあります。一つは教員に必要な力を身につけたいと思ったからです。私は中学校の社会科教員を目指しています。教職の授業における座学だけでなく、実際に教育現場に身を置くにより、より実践的に学んで知見を得ることができます。もう一つは子どもに関する様々な知見を深めたいと思ったからです。私は学部の授業で、主に子どもの心理学について学んでいます。教員は教科指導だけでなく、生徒の心の支援も重要になります。実際に思春期を過ごす子どもの言動や人間関係について知り学ぶことは、生徒理解において重要なことだと考えています。

実際に活動を始めてみて最も大切だと思ったことは、生徒一人ひとりをよく知り、理解することです。私は毎回の活動において、1人でも多くの生徒と関わることを意識しています。私は主に1年生を担当していますが、生徒によって個性や能力は様々です。生徒をじっくり見ることにより分かることもあります。実際に生徒と話したり、机間に入り生徒の支援を行うことにより、目には見えなかった一面を知ることができます。授業で積極的に発言する生徒や元気で目につきやすい生徒にどうしても関心が行ってしまいがちですが、それ以外の生徒にも関心を向け、積極的に関わるようにしています。また教科によって学習意欲が変わる生徒もいれば、合唱祭などの学校行事において能力を発揮する生徒もいます。生徒と積極的に関わるということは、生徒理解に繋がります。そして、生徒のことをよく知り理解すること、支援においても大切なことだと考えています。私は、前回できなかったことができるようになったり、良いところを見つけたときは、必ず「頑張ったね。」「すごいね。」と声を掛けるようにしています。良い所や伸びたところを指摘することにより、生徒の個性や能力をさらに伸ばし、自尊心の向上をすることができると思っています。

このように生徒一人ひとりについてよく知りその生徒に合った支援していくことを、活動の中で心掛けています。

活動を始めて3か月ほどですが、最近では生徒自身から私に挨拶をしたり、私の名前を呼んだりすることが増え、生徒とようやく打ち解け始めました。自分から積極的に動き関わらなければ、生徒の個性や良いところが見えてきません。生徒とのかかわりに方に悩むことも多々ありますが、今後はさらに生徒に積極的にアプローチし、多くの生徒と関係を築き、よりよい支援を行っていきたいと考えています。



## ～六角橋中学校&中原中学校～

目次	
六角橋中学校	
ボランティア活動を通して学んだこと	英語英文学科 4年 小野 優
生徒との関わり	電気電子情報工学科 4年 宮田 修斗
ボランティア活動を通して	人間科学科 3年 磯嶋 美波
生徒と向き合う	人間科学科 3年 坂井 達郎
生徒と同じ目線で寄り添う	人間科学科 3年 鈴木 洵太
特別支援の現場から見えたもの	人間科学科 3年 林 祐太
生徒とのかかわり	人間科学科 2年 霜阪 翼
平塚市立中原中学校	
生徒と関わり続ける大切さ	人間科学科 3年 中島 星南

### ボランティア活動を通して学んだこと

#### 英語英文学科 4年 小野優

六角橋中学校の個別支援学級に入ってサポートをしていて学んだことが二つある。

一つ目は、コミュニケーションの大切さである。ボランティア活動初日はこちらから生徒に声をかけても、答えてくれないことがあった。しかし、諦めずに積極的に生徒とのコミュニケーションを意識して接していたら、徐々に生徒のほうからも私に声をかけてくれるようになった。些細なことではあるが、私にとってはそのことがとても嬉しかった。積極的に生徒とコミュニケーションをとることによって、生徒との信頼関係を築くだけではなく、その日の生徒の様子や体調にも気づくこともできる。そのような点からも、積極的に生徒とコミュニケーションをとることは大切だと思った。

二つ目は、声掛けの仕方である。ある日、一人の生徒が騒ぎ出して止まらなくなってしまった。周りの生徒や私が止めようとしてもなかなか止まらなかったが、先生がそばによって「どうしたの？」と優しく聞くと、その生徒は騒ぐのをやめた。聞くという態度を示した声のかけ方が良いということを学んだ。また、生徒に注意をするときは、「～しない」などの否定的な言葉を使うのではなく、「～しましょう」などの肯定的で優しい言葉を使うように心がけてくださいと指導していただいたこともあった。つい否定的な言葉で注意をしてしまいそうになるので、その点が難しいと感じた。障がいがあるということも理解して生徒一人ひとりに合ったサポートをしていくことが大切であると実感した。

ここで学んだことは将来私が個別支援級を任された際や、また、一般級での指導にもつながるものであると思うので、忘れることないようにしっかりと自分の心に留めておきたい。

## 生徒との関わり

### 電気電子情報工学科4年 宮田修斗

私が六角橋中学校のATを始めて二年がたちます。六角橋中学校のATでは、主に学習室と呼ばれる特別支援学級の支援をしています。新しく中学一年生が入学してきたこともあり、今年度は昨年度とは教室の雰囲気が大きく変わったと感じています。一般学級と比べて、生徒の人数が少ないため、一人ひとりの生徒とより多くかかわることができます。この一年の活動を通して学んだことが二つあります。

一つ目は、生徒同士の距離感についてです。学習室の中には、相手との適切な距離感が分からない生徒がいます。休み時間を見ていると、二年生のSさんが一年生の生徒に密着して、じゃれあっている姿をよく見かけていました。その時は、お互いに楽しそうにしていました。しかし、一週間後見てみると一年生の生徒が少し嫌がっているように見えたので、少し声をかけようと近づくと、他の先生が先に間に入って、「距離が近い」と注意しました。「Sさんが近づきたいと思っている気持ちと同じように相手が思っているかわからないのだから、人との距離感は注意しなければいけないよね。相手の嫌がっていることをしたらそれはいじめだよ。」と指導していました。しかし、Sさんは離れようとしなため、「他人との距離は、近くても腕一本分の距離は取りなさい」と言って実際に生徒の腕で距離を測らせて指導していました。この時の先生の声のかけ方は、怒っているわけではなく、生徒に分かってほしいという思いが伝わってくるような口調で、生徒への指導の仕方を学ばせていただきました。他人との距離感、大人でも難しいものだと思います。しかし、社会で生きていくうえで必要な力です。この指導を参考に私も生徒に指導していきたいです。

二つ目は、生徒との関係づくりです。今年度の活動は主にKさんの支援が主でした。Kさんは私のことをとても気に入ってくれているらしく、私が教室にいと満面の笑みを浮かべながら「宮田先生」と毎朝寄ってきてくれます。先生方からも「宮田さんがいるときはKさんもとても落ち着いている。」と言ってくださいます。私が見ていても一昨年のKさんと比べるととても落ち着いたなと感じます。そして、

去年の10月に初めて、言葉のキャッチボールをすることができました。一年半の活動で、Kさんから話されて私が返すことはあっても、私の声掛けを言葉で返してくれることは、挨拶以外で一度もありませんでした。内容は、Kさんが鼻をすすっていたため、「ティッシュほしい」と聞くと「欲しい」と返してくれただけなのですが、とてもうれしかったです。二年間、Kさんとは一番多くかかわってきました。彼女の成長や変化を見ることができとても幸せに思います。

私は六角橋中学校のATを通して、実際の学校現場を体験することで、教師という夢がより具体的にイメージできるようになりました。また現職の先生方を見て、声のかけ方や生徒の小さな変化にも気づくことができる力など自分にはまだ課題があることが分かりました。これからも生徒や先生方から学びより良い教員を目指します。

### ボランティア活動を通して

#### 人間科学科3年 磯嶋美波

私は5月～7月までの3ヶ月間六角橋中学校で、アシスタントティーチャーとして活動をさせていただきました。主な活動内容としては、週に一度月曜日に学習室という個別支援学級で、朝学活や授業、休み時間などに生徒の生活や学習の支援を行なうことでした。最初はとても緊張していたこともあり、生徒とうまく距離を縮めることができず悩みましたが、回数を重ねていくうちに生徒との距離も縮まりとても楽しんで活動することができました。

今回のアシスタントティーチャーとしての活動を通して、先生方や生徒はもちろんですが、同じ活動をしている先輩方や友人のカンファレンスでの意見なども、とても参考になり多くのことを学ぶことができました。自分自身が中学生の時には、教室を飛び出して行ってしまう生徒や、パニックになってしまう生徒はクラスにいませんでした。また、個別支援学級などでボランティアなども行なったことがなく、学ぶことばかりでした。

始めたばかりの頃は、生徒に対してどの程度の支援を行えば良いのかわからず、授業中や休み時間も立っているだけの時間が多く役に立っていないな

と感じていました。体育の授業では、体育館の隅に行ってしまう生徒、異なる遊びを始めてしまう生徒などがあり、そのような生徒に対してどのように声掛けを行えば良いかわかりませんでした。その際に担当していた先生が、自分ができるところまで頑張ってみてという声掛けを行っており、他の生徒と同じように活動させなければいけないわけではなく、生徒たちにあった指導や声掛けが大切なんだということを学ぶことができました。また、数学の時間に、1年生の生徒を2人担当して解説や丸付けを行っていたのですが、2人の学習内容や理解度に差があったこともあり、どちらかの生徒ばかりに気が行ってしまって生徒のやる気をなくさせてしまったことがありました。解説もうまくすることができませんでした。授業後の休み時間に先生からいただいたアドバイスで、生徒はみんな褒めてほしいと思っているから、出来ていたときはしっかりと褒めてあげることが大切で、私はそこを意識して生徒と接しているよということをおっしゃっていました。丸付けや解説をすることだけではなく、しっかりと生徒の気持ちを考えて接することや生徒が何を求めているのかを考えて行く必要があると感じました。

週に一度の活動で短い時間でしたが、普段の講義では学ぶことができないことや、実際に体験することで気づくことなどたくさんのごとを得ることができました。今回学んだ事を自分の指導に活かしていくことが出来るようにしていきたいと思えます。



## 生徒と向き合う

### 人間科学科3年 坂井達郎

私は、5月から六角橋中学校で週に一回、学習室と呼ばれる個別支援学級のアシスタントティーチャーを行っています。この活動を始めたいと思ったきっかけは、現場での先生の行動や言葉かけ、生徒の実態を自分の目で確かめ学びたいと思ったからです。私は保健体育科の教師を目指しています。そのため個別支援学級の生徒に対しての知識は正直ほとんどなく最初はどのように関わったらよいのだろうかと不安を抱いていました。しかし、個別支援学級だったからこそ、どのように生徒と向き合うべきなのかということ学ぶことができたと感じています。

学習室には、授業中にじっとしていられず教室から飛び出してしまう生徒や、些細なことでパニックになり大声を出してしまう生徒、様々な個性を持つ生徒がいます。しかし、私は生徒たちにどのように対応するのがいいかわかりませんでした。そのたびに先生に頼ってばかりで、自分の力では生徒たちは落ち着いてくれない、分かってくれないと向き合うことを避けてしまう時もありました。先生からは、「ただそばにいてあげるだけでもいいのです、生徒に寄り添ってあげてみて」という温かい言葉をいただきました。私はその時から、自分から生徒と向き合うことに逃げてはいけないのだということ強く感じました。生徒たちはいま、何を考えているのだろうか、どうして感情的になってしまっているのだろうか、何を伝えようとしているのだろうか、深く考えるようになりました。そうして、うまく対処ができなかったとしても、近くで生徒の意見を聞いてあげる、生徒の気持ちを汲み取ろうとする行動に変化してきました。すると、生徒たちは少しずつではありますが、心を開いてくれるようになったり、自分の気持ちを表現してくれるようになったり変化してくるようになりました。

これらの経験から、生徒と真剣に向き合う、情熱を持って接することの大切さを学びました。このことは決して個別支援学級の生徒に限ったことではないと思います。むしろ、個別支援学級だったから、一人ひとりと向き合える時間があつたものの、一般学級では一人一人と向き合う時間がそこまで確保でき

ないでしょう。そんな中で自分の気持ちを表現できない生徒や、悩みを抱えている生徒たちに寄り添うことができるかが大切になっていくと思います。

少しでも生徒の成長を手助けすることができるような存在になり、そしてまた自分も生徒とともに成長できる存在になれるように頑張っていきたいと思います。

## 生徒と同じ目線で寄り添う

### 人間科学科3年 鈴木洵太

私は今年の5月から六角橋中学校で個別支援学級のアシスタントティーチャーをしています。中学生の生徒に関わるのは初めてのことで、最初はどうやって接することができるか、自分を先生として受け入れてくれるのか不安でした。しかし、生徒のみんなは初日から自分のことを「先生」と呼び、いろいろなことを話したり、聞いたりすると本当に毎週ボランティアに行くことが楽しみになりました。部活動の活動で長らくいけない期間があり、生徒たちは自分のことを忘れてしまったのではないかなどと思い、不安になったこともありましたが生徒たちは久しぶりに私にあったことを感じさせないくらいにいつも通りに接してくれました。

アシスタントティーチャーの活動としては、授業中の生徒の学習の手伝い、個別での学習のサポートが主な活動です。その活動の中で気づいたことは生徒と同じ目線で立って発言・行動・授業づくりをすることがとても重要だということです。私はある生徒の数学を個別に担当しています。その数学の学習の中で「後はこれだけで終わるから頑張ろうね!」と言いました。一見、生徒を励ます何の変哲もない言葉に見えます。しかし、その言葉の“これだけ”という言葉に反省しました。自分は大学まで勉強してきた過程があるのでその問題は自分から見ればこれだけに見えたと思います。しかし、生徒にとってはその問題はとても難しく、“これだけ”ではないかもしれません。仮にその問題を生徒が難しいとっていて、先生から「これだけだよ!」と言われたらどう思うでしょう?きつといい思いはしないと思います。

この出来事からボランティアの際に意識している

ことがあります。それは生徒が学習に取り組みやすい環境を作り出すということです。個別支援学級の生徒たちには難しいことがたくさんあります。難しいことに対して気持ちが素直に表に出てしまうので「難しくできない」「もうやりたくない」といった言葉をよく言われます。その時に先生が「いいからやってみなよ」等のことを言ったら生徒はますますできないのという感情が増えてしまうでしょう。そういった時には私は言葉と行動で生徒の学習をしやすいようにしようと考えています。小さいことから先生と一緒にやってみようということを伝えると生徒は難しいと思っていることにでもチャレンジしてくれる姿が多くみられます。学習しやすい環境は言葉や行動だけではなく、授業の雰囲気づくりや教室の使い方、物の準備もとても重要です。学校の現場にいる先生はそういう点が個別支援学級は一般級よりも大切になってくると教えてくれました。今後ボランティアを行っていくときも生徒と同じ目線で立って寄り添うことを大切にし、日々生徒と一緒に学んで、成長していきたいです。

## 特別支援の現場から見たもの

### 人間科学科3年 林祐太

私は今年度の4月から六角橋中学校のATとしてボランティア活動に参加しています。六角橋中学校での主な活動としては、個別支援学級での授業のサポートをしています。前期から参加しているこの活動ですが、後期はより深く個別支援学級の生徒や担当の先生方の動きを見ることができたと思います。また、前期よりも意欲的にボランティア活動に参加できたと思います。一般的には特別支援学級と呼ばれていますが、横浜市では個別支援学級の名称を使用しています。

個別支援学級の生徒の中には、授業中に勝手に動き回る生徒や、声を出してしまう生徒、そのような生徒にイライラしてしまう生徒など、様々な子どもがいます。その中で教員がどのように動くべきかを学ぶことができることは、非常に貴重な経験です。朝、学校に来たらまず声をかけること、生徒が頑張っている活動を褒めること、生徒の感情を抑えすぎないようにすることなど、様々なことが大切であ

ると気づきました。また、生徒それぞれの性格などを把握し、それに合った支援をすることの大切さもわかってきました。現場の先生方はとてもそれらのことを上手くできていて、参考にしたいと思うことがたくさんありました。一般学級の生徒もそうですが、個別支援学級の生徒に対しては特に、細かいことにまで気を配っていなければならないと感じました。

ATとして活動をしていて、自分の力不足を感じてしまう場面もありました。個別支援学級を担当している先生から、ある生徒の横にいてあげるように頼まれたときに、その生徒が授業中に歩き回ってしまったり、パニックに陥ってしまうことが何度ありました。そのようなときには私はその生徒に必死に声をかけるのですが、全く生徒の耳に届いていないようで、私自身の無力さを感じてしまいます。このような感情になることは教員になってからも幾度とあることだと思います。実際に教員になってからではなく、学生の時期にこのような経験ができて良かったと思います。

個別支援学級のATをしていて良かったと感じることも多くありました。個別支援学級の生徒はとても素直な生徒が多いです。体育の時間に一緒に走ったり、休み時間に生徒の好きなもの話を聞くなど、コミュニケーションをとって非常に楽しいです。朝から正午にかけての活動なのですが、私が帰るときには「先生次いつ来るの？」と声をかけてくれる生徒もいて、「今日も来てよかった。」と感じることがあります。

ATをしていて、二十代の先生がとても頼もしく見えるときが多くあります。私もあと数年のうちにそのような教員になれるのだろうかと不安に感じることもあります。ですが、六角橋中学校のATや他にも行っているボランティア活動のなかで、多くのことを経験し、様々なことを考え、自分というものをより高め、成長していきたいと思えます。

## 生徒とのかかわり

### 人間科学科2年 霜阪翼

私は六角橋中学校の個別支援学級でたくさん学んでいる。一人一人抱えている問題は異なり、対応の

仕方も違ってくる。大きな音を苦手とする生徒に対しては挨拶の時などイヤマフを付けさせるなど障がいに応じて対応をしている。生徒の障がいをしっかりと理解し、個々にあった対応をすることが大切であるとボランティア活動を通じて学ぶことが出来た。

私は、生徒に覚えてもらうために積極的に声を掛け、授業や休み時間で多くかかわりを持つと努めた。休み時間では、部活の話や週末の出来事を話し合ったりして、毎週出来事を話しあうことが習慣化してきた。また、授業中では、困っている生徒に声を掛け、教えたりできたことは褒めてあげるなどして自信を持てるような働きかけをしてきた。今では、「翼先生」と生徒から積極的に声を掛けてもらえるようになり、とても楽しく活動ができています。私はM君を主に担当しており、M君は授業中よく走って抜け出してしまう生徒である。授業中抜け出したのを追いかけて教室に戻ろうと声を掛けると素直に応じ、教室に戻ってくれる。しかし、毎回素直に戻ってくれるのではなく、授業を受けたくない拒否してしまうことがあり、とても難しいと感じることである。このような生徒には、教室に戻って頑張ることを働きかけても強く拒否を示すので、次の授業を頑張るように促すことや先生としっかりと話し合うことが大切だと感じた。

体育の授業ではアルティメットを行っている。私は体育を専門としているので、体育の授業で上手に投げられるコツなど教え、楽しく学習できるようにサポートしている。ゲームでは勝敗ではなく、仲間への声掛けを大切にしているので、積極的に「ナイスパス」や「どんまい」などの声掛けをして生徒にも声掛けを大切にするように指導しながら行っている。生徒は自分が出来ているか先生に見てほしいと思っており、認められたいと思っているので、先生はしっかりと観察し、生徒を褒めてあげることが大切であると感じた。また、授業の最初に行っているランニングはやる気が起きないことが多いので、生徒の背中に手を当てて走ったり、後ろから来てる友達に抜かれたら罰ゲームと言い楽しく活動できるような工夫をすることが大切だと思った。教師からの言葉がけや教師行動によって、生徒の考え方や行動は変わるので、生徒とのかかわり方を考えて活動をしていきたいと思う。

## 生徒と関わり続ける大切さ

### 人間科学科3年 中島星南

私は、毎週月曜日に平塚市立中原中学校で学校ボランティアをやっています。前期は、特別支援学級で生徒の学習のサポートを行っていましたが、後期は通常学級に入り、観察したうえで支援が必要だと思う生徒の学習をサポートしています。主に、美術や技術など、生徒自身の作業が多い教科や、苦手と感じる生徒が多い数学の授業に参加しており、時々個別学習も担当します。個別学習では主に数学の勉強を行っています。

普通学級において、フィリピン出身の男の子で、日本語指導を必要としている生徒がいます。その生徒とは毎週技術の授業で共に学習しています。内容は、木材で自ら選択したCDラックや本立てを作成するものです。彼は、日本語が全く話せません。また、話されている日本語も理解できていないようでした。そのため、黒板に書いてある文字を書き写すことは、彼にとってとても難しく、またとても時間がかかります。あまりにも時間がかかってしまい、ほかの生徒と比べ、作業を開始する時間に差が出てしまうため、彼に出会った初めころはノートに板書を写すよう指示するべきか迷いました。しかし私は、仮に時間がかかってもほかの生徒がノートをとっている時は、同じことを同じように取り組むべきだと思い、いつも板書を写すよう促すことにしました。みんなが作業を開始するときにノートへの写しが終わっていないければ、キリのいいところでやめ、作業を開始するようにしています。技術科の先生に相談したところ、ほかの生徒と同じことを同じタイミングで行うということは彼自身の安心感や帰属意識にも繋がるから大事なことである、継続してほしいと言われました。言葉が通じなくても、同じ行動をするということで、少しでも彼の不安や、孤独感などを解消することができたらいいなと思い、日々指導しています。また、拙い英語しか話せなくても、単語やジェスチャーだけで充分伝えることはできるので、伝えようとする気持ちがどれだけあるかが大事なだと学びました。

彼は、英語科の先生や外国人の先生から個別学習指導を受けています。学年の教員同士で情報を共有

して、少しでも早く日本語に慣れることができるように協力して指導を行っていることを聞きました。学級担任だけではなく、どの先生も生徒の情報を知り、同じ対応ができるということが、支援を必要とする生徒にとっては重要であることを学びました。

他にも私は、個別学習を通して、学習に著しい遅れのある生徒の学習支援を行っており、1年生の女の子と3年生の男の子に数学の勉強を教えています。中原中学校では学校全体で約20名の生徒が個別学習を行っています。個別のファイルが職員室においてあり、個別学習専門のサンサンスタッフの方や、個別学習担当の教員が、いつでも学習内容の共通理解が図れるようにしてあります。教員同士の連携が大事であることは授業で何度も学習していましたが、実際に現場では、忙しい中で情報共有できるような工夫がたくさんあるということを知りました。

個別学習では特に、生徒一人ひとりに合った接し方や指導を考えなくてはならないため、生徒とより多く会話をし、得意不得意なことを明確にしたり、性格を把握したりすることが重要であると思いました。苦手意識をなくすためにも、問題が解けたら必ず褒めることや、間違えてしまっても過程から一緒に考え直すなど、いつも自分の中で徹底することを決めて個別学習に臨んでいます。生徒にとって、学習というものが取り組みやすいものであるという考えに変わるよう、努力していかなければいけないと思います。

学校ボランティアでは、様々な学年の授業を見ることができ、たくさんの生徒と関わることができ、また、学校内で起きている問題や、先生方の取り組み方なども知ることができます。大学の講義で理解できたと思っていたことも、実際の教育現場にいくことで、より理解が深まったと感じています。講義で学んでいくことに加えて、実際生徒と関わったり、先生方の話を聞いたりすることで、教員として自分はどうなりたいのか、どういう生徒を育てたいのかの方がより明確になっていくのではないかと考えています。私は、学校ボランティアを通して、理想の教員像を明確にし、目標に向かって努力していきたいです。

## ～川崎市立中学校～

### 生徒とどのように関わるのか

生徒とどのように関わるのか  
(川崎市立東高津中学校・田島中学校)  
経済学科3年 中川 裕樹

距離感を意識したサポートを  
(川崎市立東高津中学校)  
英語英文学科3年 飛田 梨沙

中学レポート  
(川崎市立高津中学校)  
人間科学科2年 加納 史隆

西高津中学ボランティアレポート  
(川崎市立西高津中学校)  
人間科学科2年 鈴木 良太郎

臨機応変に動く  
(川崎市立塚越中学校)  
電気電子情報工学科4年 内田皓大

### 経済学科3年 中川裕樹

私は生徒の個性を大切にするように心がけて活動してきました。学習するのにも生徒一人一人の方法がより内容を理解することができるのかを私なりに考えて、なるべく工夫して接してきました。なかなか良い方法が見つからなかったときには担任の先生や特別支援の先生などに相談したりしてアドバイスを頂いたり、思いついた方法を少しでも多く取り入れてみて、うまく行かなかった場合にはまた別の方法を考えたり、どうしたら良いのかを失敗した方法を見直して見て、生徒にとってよりわかりやすく授業はどうしたらよいのか、改良してみたりしました。具体的には、英語であればリスニングを行って、英語を音として情報が耳に入ってくるようにしました。英語の文章を読んでそのあとすぐに日本語訳と一緒にやってみることで、何を書いているのか分からないようなものを少しでもどんなことを書いてあるのか解るようにして、理解できるように工夫したりしていました。そのような色々な工夫をしていく中で生徒が内容について理解できたり、一節でもスラスラと英文を訳すことができたりしたときには何とも言えぬ感動を感じました。生徒がその中で一言「ありがとう」や「わかったよ」と言ってくれたことだけで今までの疲労は吹き飛び、また次も頑張ろうと活力が湧いてきます。

生徒を注意する機会があるときには、なるべく生徒の話しを聞き生徒の意見や考え、理由を理解するように心がけてきました。過去に先生が生徒に平和は「peace」だけども、ワンピースの「ピース」の単語わかる人いるかと質問した時に、ある生徒が突然ケンタッキーの1ピースと言ってきた。私や周りの先生は最初この子は何を突然言い出したのだろうかかと疑問に感じましたが、ある先生が「すごいね！同じスペルだね！」と言って私もはっと確かに同じス

ペルであると感じることができました。これも一瞬の判断ではその子は関係ないと言っている聞き流されたかもしれないが、ちゃんと生徒のことを理解しようとしたことで生徒の発言しようとしたことを汲み取れたのではないかと思います。

このように生徒の積極的な発言や活動を認めた上で生徒が、何を言おうとしているのかをちゃんと考えて、生徒にその発言の意味などを聞く必要があるのではないかと考えました。また生徒ができたときには生徒のことをしっかりと褒め、認めることが大切であると思いました。

## 距離感を意識したサポートを

### 英語英文学科3年 飛田梨沙

私は10月に東高津中学校で教育サポーターを始めた。サポーター自体が初めてで、まだ数回しか行っていない。しかしこの数回のうちに学んだことは多く、課題もできた。このレポートでは、生徒との距離感をテーマに私の学んだことを紹介していきたい。

サポーター初日から今日までの大きな課題でもある生徒との距離感だが、生徒との関係性にどこまで踏み込んでいいのかが悩みである。生徒と仲良くなって信頼関係を築くことは重要だ。しかし、近所の子供と接するわけではなく、先生と生徒の関係性でなくてはならない。サポーター初日、支援級の生徒は人見知りが多く、なかなか打ち解けることができずにその日は終わってしまった。後日から、積極的に話しかけに行った。名前を覚えて、生徒の名前を呼んでから会話をすることを心がけた。二日目で急遽、支援級で英語を使った簡単なレクリエーションを頼まれ、即興だが私のことを知ってもらえるビンゴゲームを行った。生徒の興味を引き付けることができ、盛り上がったので感触がよかった。三日目になると、人見知りの女子生徒が私に心を開いてくれた。ほかの生徒も徐々に私のことを認識してくれて、六日目にはまた別の男子生徒が私に興味を示してくれた。この男子生徒は物静かな子で、話しかけても基本的に返事はないが無視しているわけではない生徒である。声は出さないが私に関わろうとし

てくれた。学校の生徒の中には、積極的に話しかけてくれる生徒もいるが、ほんの一部に過ぎない。どの生徒も、私が話しかければ笑顔で応えてくれる。積極的に関わろうとする気持ちの重要性に改めて気づかされた。

徐々に生徒と打ち解けることができたが、ここで新たな課題が生まれた。取り出しで英語の授業をしているのだが、仲良くなりすぎて肝心の英語の勉強に入りづらくなっている。英語の勉強に誘導しようとするものの、またすぐに別の話題で流れてしまう。この生徒は賢く、自分の興味のあるものに対しては、高い集中力を持って取り組むことができる生徒だ。英語を勉強することに対してどのように興味を持たせるか模索しているところだ。この生徒に合った方法でうまく誘導したい。逆に生徒との距離が近すぎてしまうと、学習の面でうまくいかないことがある。

生徒との関わり方は、生徒一人ひとりの性格を見極めて合わせる事が大事である。支援級の生徒にはマイペースな生徒が多いが、一人の生徒のペースに合わせすぎてしまうのも問題である。どこまでを許容するか判断と、バランスが難しい。私は教職の世界ではまだまだ未熟な学生的身であり、考えても分からないことが多い。東高津中の先生方に積極的に相談してアドバイスをいただきたい。

## 中学レポート

### 人間科学科2年 加納史隆

9月になり中学校は、学校全体としては少々落ち着いた様子が見られたが、9月を過ぎたところでもその様子も見られなくなり、学校の雰囲気としてとても活発な様子が見られた。私が主に活動を行なっている学習支援学級では、夏休みを経て、生徒が私の名前や顔を忘れてしまったようで、とてもよそよそしい態度であった。そのためまず私が行なったことは、生徒との距離を縮めるということである。縮めるのは会話による精神的距離と接触による物理的距離である。

会話では、私が月曜日に活動していることもあり、「昨日、どんなことをしたの？」からはじめることが主である。また支援級の生徒にとって昨日の活動

を考えるとすることは、振り返りの面からも必要ということでも学級担任がしていたためである。その効果としては、最近では生徒が自ら土日の行動を教えてくださいようになったり、自分の趣味などを教えてくださいようになった。接触による物理的距離を縮めようとしたこと理由として、ある生徒が自分の世界に入ってしまったたり、授業に集中できないときに決まって自分の手を自分の耳に当てる行動をとっていることが見られたからである。手を耳に当てると自分の筋運動の音が聞こえ、それによりストレスを軽減させているのではないかと考え、落ち着かせるには物理的接触が効果的ではないかと考えたからである。実際に当該生徒が落ち着きのないときに接触を行なうことで、落ち着きを取り戻した。しかし反面、その生徒は甘えるという行動をとるようになった。この行動は以前よりあるらしく、担当教員にも頻繁に接触を求める行動をしている。教員という立場側から物理的接触のアプローチを行なうことは、あまり行なうべきではないのではないかと感じた。

後期中ごろ、支援級に転校生が来た。転校生は以前から、生徒たちとは知り合いであるらしく、初日からとてもクラスになじんでいた。転校生というと、クラス内は浮き足立ってしまうのではないかと思ひ、支援級ではなおさらなのではないかと考えていたが、実際はそうではなかった。自分の世界がぶつかりあうこともなかった。私はこの自分の世界を持っていることが支援級の社会性を保つ上で重要な働きを持っているのではないかと思うと同時に、教員側からすると、とても扱いにくいものではないのかと感じた。生徒が教員に対して自分の世界観で物事を話している際、教員は聞くことに徹している。しかし、その話に対する反応は無く、クラス全体に次の行動を呼びかけるなどの対応をしていた。私も生徒に対してそのような話をされることは多いので、どのような対応をすればよいのか疑問である。

## 西高津中学ボランティアレポート

### 人間科学科2年 鈴木良太郎

私は、このボランティア活動を通して学んだことは生徒との上手な距離感のとり方です。最初に行ったときはどのくらいの距離で話せばいいのかもわからず、また、どのようにしゃべりかけていけばいいのかもわからない状況でした。しかし、回を重ねるごとに生徒とも打ち解けていき話し方もわかるようになっていきました。その代表的な例として二人の生徒が挙げられます。

一人目は、Tさんという少し多動傾向がある生徒です。彼は、落ち着きがあまりなく授業中に先生の許可なく席から立って辞書を取りに行ったり、鉛筆削りを持ってきたり勝手な行動をしてしまいます。そのため、最初はとてもしつこくきつい子だと思っていました。だけど、先生がしっかりと注意をすると素直に聞くことができ、自分の非をちゃんと受け止め、認めることができる子なのだとわかりました。それからは、こちらから話しかけにいたりしてうまく関係を築いていきました。その中で、叱るときは叱ると楽しむところは楽しむというメリハリをしっかりつけて関わることの大切さを学ぶことができました。と思いました。

二人目は、Mさんという生徒のことです。彼とは、2時間目の個人数学の時間にしか会うことはできないけれど、その中でもきっちりと関係を築けたと思います。理由は、初めて会ったときに個人数学の時間で教えたときに一気に仲良くなれたからです。その生徒と初めて会ったのは西高津中学校に行きはじめてから3回目くらいのときです。まだ学校やクラスの雰囲気になじめてなかったときに出会い、彼が積極的に話しかけてきてくれて若干心に余裕ができたことで打ち解けていくのが早まったのだと思います。今では、普通に話したり、少しふざけあったりするなど、まるで自分が中学生に戻ったような感覚です。しかし、そこでも先生と生徒という関係は崩さずに良い関係を保っています。

最後に、まだまだサポーターとしては経験が浅いので西高津中学の先生方のようにもっときびきび動けるようになりたいし、生徒との関係ももっと深めていきたいと思います。それに、来年度になれば新

たに生徒が入ってくるので、気持ちを引き締めてさらにがんばっていきたいと思います。

## 臨機応変に動く

### 電気電子情報工学科4年 内田皓大

私は塚越中学校で主に3年生へのサポート活動をしています。活動内容は学級に入ることのできない生徒に対して別室で勉強のサポートをすることです。その生徒は初めのころは、数学が苦手で九九も覚えていない状態でした。それもあって勉強することにとっても抵抗があり、別室ではずっと折り紙を折るか、絵を描いていました。先生からまずは、「九九をできるようにさせてほしい」と言われていたので、どう勉強に向かわせればよいかのが難しかったです。初めの1か月ほどは一緒に九九カードを作り、神経衰弱をしながら人間関係を築き、同時に九九も覚えていきました。今は人間関係ができているというもあり、本人は口では「あんなに嫌いだったのに何で今こんなに勉強しているのだろうか?」と言いながら入試の勉強を一緒にやっています。

彼女は毎日予測のできない時間に登校してきます。そのため教員同士がこまめに情報を取り合う必要があります。職員室では何時間目にどの先生が対応するのかを書いてあるホワイトボードが置いてあり、私は毎回確認するようにしています。しかし、それだけでは細かい情報までは伝わらないため、なるべく会話で情報交換し、行動するようにしています。実際に、登校してきた生徒が、学級に入り授業を受けていると情報が回ってきたので先生に確認してみたところ、何か理由があって嫌々教室に入っていく、その反動で飛び出してくる可能性があるからその対応をお願いしますと言われました。廊下を注意していると生徒が荷物を持って廊下をふらふらしていたので、別室で勉強をしました。この時、先生と話し合っておいてよかったと実感しました。



# 戸塚高校定時制

## 「学びなおし」と教育実習から感じたこと

### 自治行政学科科目等履修生 栗田佳苗

私は戸塚高等学校の定時制で、学びなおしのボランティア活動を大学1年生から今年の5月まで約5年間活動させていただいた。

学びなおしという授業は、1・2年生が対象で各学級の時間割に組み込まれている。主な授業内容は45分の授業時間を10～15分に区切り、国語、数学(算数)、英語の小中学校の内容のプリントを用いて、個人で学習を進めていく。定時制に通う生徒は様々な事情を抱えている場合が多く、その様々な事情によりそれまで勉強から遠ざかっていた生徒もいる。しかし、その生徒たちも卒業後はそれぞれの進路に進むことになり、小中学校の基礎的な学習が身に付いていないことでの就職困難や進学困難を避けるため、高校での授業の理解を容易にするために「学びなおし」という授業が設定されている。

今年は、母校でもある戸塚高校の定時制で教育実習もさせていただき、まだ実習に入る前の5月に学びなおしの活動に参加させていただいた。学びなおしの活動をしている中で、1年生の学級でよく出ていた言葉がある。「これ何のためにやるの?」「やる意味あるの?」「将来役に立つ?」という疑問の声である。

大学を卒業した今の私からすると、できるときにたくさん勉強した方がいいと考えているが、高校在学中は私自身、何のためかも考えず、“とりあえず”やっていた。生徒たちが求めている答えは、先生方や学生ボランティアの私たちが言葉で説明しても納得はできないものであり、その場での実演などもっとできないものと感じ、その後の教育実習で教科の授業を生徒の前でするよりも難しいことであると感じた。

「これ何のためにやるの?」「やる意味あるの?」「将来役に立つ?」という疑問の声は、1年生の学級ではよく出ていた言葉であるが、2年生の学級ではほとんど出なかった。実習中に3・4年生と関わる

機会もあったが、その言葉は出なかった。私は、時間が経つにつれてその答えはその人自身の中で出るものではないかと考えている。答えが出るまでの時間も納得度もその人により差はあるが、自分の中で理解できたときに人は成長するのだと感じた。

私の中の答えが正しいかはわからない。先生方にも他の学生ボランティアにもそれぞれの答えがある。生徒はひとつの答え、一人の答えにとらわれるのではなく様々な答えを知ること、自分の考えに繋げてほしいと感じた。

学校で勉強することはとても大切なことである。しかし学校は、生徒と歳の近い人から人生を倍以上も経験してきたベテランまで、幅広く関わることのできる場所である。人としてどう生きるか、人としてどう生きるか、勉強の先も学べる場所であってほしいと感じた。





<h1>目次</h1>
<b>神橋小学校</b>
「生き生きとした外国語活動」 英語英文学科4年 末廣帆乃佳
「授業に真剣になれない生徒への対応」 英語英文学科4年 山下晴菜
<b>斎藤分小学校</b>
「斎藤文小学校でのサポーター」 英語英文学科4年 市川隆紀
「生徒との信頼関係」 英語英文学科4年 今井翔太

## 生き生きした外国語活動

### 英語英文学科4年 末廣帆乃佳

私は神橋小学校に、外国語活動のサポーターとして週1回、約3年間お世話になっています。今年度は6月に教育実習もさせていただき、児童とのかかわり方や授業作りに関して新たな視点を持ち、活動に取り組んだり学んだりすることができました。サポーター活動を通して多くの学びを得ることができたのは、丁寧にご指導してくださる先生方や力不足の私のことも先生として慕ってくれる児童のおかげだと感じています。

私がサポートに入る際に目標にしていることは、「児童全員が英語を楽しみ、生き生きと活動に取り組んでいける状況をつくる」ということです。外国語活動の授業内の活動はゲーム形式のものが多いため、他の教科に比べると楽しく学習が進められる内容だと思えます。そのため、児童が授業を楽しんでいる様子は見受けられるのですが、児童同士のやり取りになると日本語でのコミュニケーションが行われてしまう場面が時々あります。このような場面を見かけたとき、「きっと、児童はゲームに熱中するあまり、ゲームに勝つことが目的になってしまっているんだ」と初めは思いました。ただ、実際に声を掛けてみると、そういった理由だけではなく、英語を話そうと思ってはいるけれど言いたい英語表現を思いつけないことから日本語になっているという児童も多かったです。そこで、もう一度丁寧に児童の言いたい英語表現を教えると、その後の活動では楽しそうに英語でのコミュニケーションを行っている姿を見ることができました。児童全員が英語を楽しむためには、教室全体を把握できるように常に広い視野を持つことと、小さなことでも見逃さないということが重要だと感じました。また、児童に対して積極的にかかわりを持つとする姿勢も大切にしたいと思えます。児童の様子を見ただけで理解したつもりになるのではなく、実際に関わってみて一人ひとりの状況に応じて、どういうサポートができるだろうと考え、実践し、上手いかなければ別の方法を考えてみるという手順を踏んで、目標を現実のものに近づけていきたいと思えます。

外国語活動のサポーターとして神橋小学校に行く

回数も残りわずかとなってきました。最後まで、気を引き締めて、児童が生き生きとできる空間作りに貢献できるよう、活動を充実させていきたいと思えます。

## 授業に真剣になれない生徒への対応

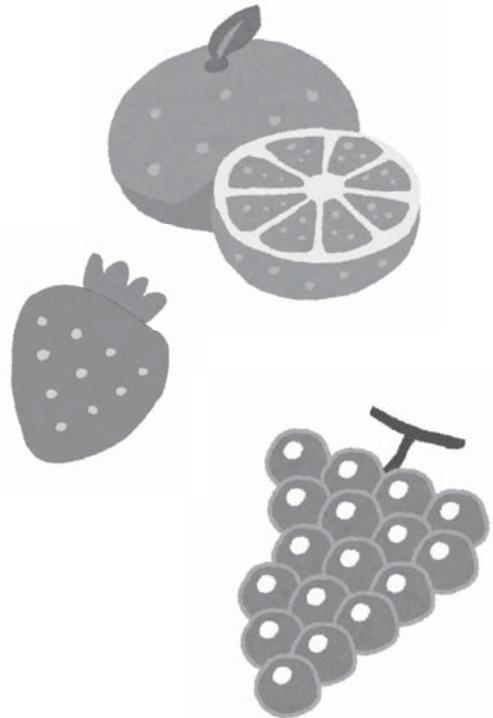
### 英語英文学科 4年 山下晴菜

私は2年生の4月から神橋小学校で外国語活動のサポーター（以下ATとする）をしています。今学期は毎週水曜日の午前中に、低学年から高学年まで幅広く授業を支援しています。ATをしていて、普通級においても、席についてじっとしていることが苦手で、立ち歩いてしまう生徒がいると気づきました。また、英語の授業中でも、友達同士のペアワークでは英語を使おうとしない生徒もいます。今回はこうした生徒へどう対応するべきか考えました。

立ち歩く生徒に対して無理に「席について」と言っても、嫌がるばかりで余計に授業を聞かなくなったり、逃げ回るようになってしまったりしました。担任の先生方は、こうした生徒が立ち歩いていても注意していないことに気づきました。生徒は黒板の目の前にいるほうが、余計なものが目に入らないため、授業に集中できる様子でした。さらに先生方はただ生徒を放っておくのではなく、時折生徒に話しかけて、授業の内容がわかったか確認していました。このことから、生徒にはそれぞれ聞きやすい姿勢や環境があり、座っていないからといって授業を聞いていないわけではないのだと考えるようになりました。重要なのは生徒が授業に置いて行かれないように、生徒とコミュニケーションをとって、どの程度授業を理解しているか確認を怠らないことだと感じました。

次にペアワークで英語を使おうとしない生徒についてです。生徒が英語を使おうとしない原因には、まず授業で習ったことが定着していないことが挙げられます。「わからない」と言うことに恥ずかしさを感じて先生や友達に聞けない生徒がいます。ペアワークに入る前に、生徒全員が練習できる時間を十分にとることが大切だと思いました。全体練習では生徒が一斉に練習をするため、生徒一人ひとりをよく観ていないと、本当に正しく発音できているのかわかりにくくなります。教師は黒板の前で見ている

だけでなく、生徒の間に入って生徒の発音をよく聞いたり、「わからないことはない？」などと声をかけたりして生徒が授業についていけているか確認していく必要があります。別の原因として、ゲームで勝つことに気をとられて「英語を練習する」という活動の目的を忘れてしまうことがあります。授業の最後に生徒たちは振り返りカードを書きますが、英語で活動をしていなかった生徒はたいてい「ゲームが楽しかった」と書いて振り返りを終えてしまいます。そうした生徒は、英語を話せるようになることに興味がない様子が見受けられます。先日、英語で活動をしていなかった6年生の生徒に「中学生になる準備だと思って練習しようよ」と言うと急に真剣に英語を話し始めました。教師は生徒が現実的に感じられる場面設定をして、より強く英語を身に付けたいと思える目標設定をしなければならぬと思いました。



## 斎藤分小学校でのサポーター

### 英語英文学科4年 市川隆紀

#### 学んでいること

私は、外国語活動サポーターとして横浜市立斎藤分小学校で週に一度行っている。担当学年は個別級と3、4、6年生である。どの学年にも共通しているのが、英語という外国語・外国の文化に対してほとんど抵抗がなく、学習しているという点である。英語を話して行く活動やゲームを非常に楽しみにしている様子を感じることができ、私も一緒に楽しんでいる。好奇心旺盛な小学生と触れ合っていると、英語は教科や勉強という概念ではなく、1つの言葉として純粋に取り組んでいる様子であると思う。

外国語活動に参加していて、これから大事なと感じたことがあった。それは、学級経営である。6年生のクラスはそれが非常に上手くできていて、私も感心している。まずは、挙手の仕方である。クラスの児童がみんな積極的であるから、どんどん手が上がる。そのため挙手をする児童は、自分が何回指名されたかを指で示しながら挙手をする。0回だったら、拳にして。1回だったら指を「1」と示す。そうすることで、先生も公平に指名でき、児童がほぼ同じ回数だけ発言できるような仕組みになっている。中学・高校と挙手を自らする生徒が少なくなっていってしまうかもしれない。だが、積極的なクラスや小学生を相手にしたときなどでこの方法を参考にしていきたい。

次は、児童たちの切り替えの上手さである。聞くことと活動の切り替えが非常に上手い児童たちである。聞くときは、書くことも中断し先生の話や見本をしっかりと見てうなずき、英語で反応を見せている児童もいる。最近驚いたことは、児童が「Let me try.」や「I got it.」などの表現を使っていたことである。そこで私は、「Nice phrase! これからも忘れないようにね。」と、声をかけた。学級担任が英語を専門としているだけあって、教室のいたるところに英語のフレーズが貼ってある成果なのかもしれない。活動の際も、メリハリをつけほぼ英語で行い、教室中がうるさくなるくらい活発である。この切り替えの上手さは、児童の力だけでなく学級担任のマネジメ

ント力も影響していると感じている。一体感のある学級に非常に驚いている。

#### これからの生かすために

今年度で学生ボランティアという立場は終わり、来年度からは一教師として教壇に立つ。生の教育現場で貴重な経験をしてきて、様々なことを学んできた。それらはこれからの長い教員生活に少しでも役立させていかなければならない。そのために、あと少しの間、私なりに学べるものを探し、私自身の成長につなげていく。日々精進していく。

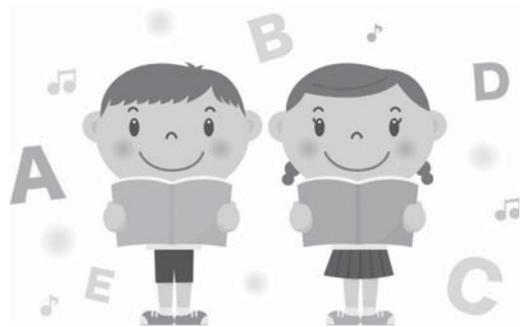


## 生徒との信頼関係

### 英語英文学科 4年 今井翔太

高橋先生の勧めで今年の4月から齋藤分小学校で外国語活動のボランティアを始めさせていただいてから約8ヶ月となった。優しい先生方やユニークなALTの先生のおかげでのびのびと活動させていただいている。齋藤分小学校の児童はとても素直で活動をしているとこちらまで元気をもらえて、心が洗われる感覚になることが多々ある。児童は先生方を信頼し、先生方は「生徒のために」という思いで言動をされている素晴らしい教育現場だと思う。その中でも特に6年生のクラスは児童間だけで統率が取れており、担任の先生が普段から素晴らしい指導をされているのだと常々思われる。また、6年生の担任の先生は中高の英語科の免許を取得していることもあり、クラス内には様々な英語のフレーズが張り出されており、6年生の外国語活動は他の学年の追従を許さないレベルになっている。学年ごとにレベルの差があることは確かだが、どのクラスも生徒は生き生きと楽しそうに外国語活動に取り組んでいる。これは外国語活動が他の教科と比べて授業運営が特殊であることも要因の1つであると思われるが、教師(担任、ALT)と生徒の信頼関係があるからではないかと思うようになった。生徒が安心して学ぶことのできる環境を先生方が整えていることで生徒は思うままに発言できて、間違えを恐れず全力で活動に取り組んでいるのではないだろうか。私の活動は基本的に生徒のモデルとなったり、個人的に児童の補助をするのだが、児童のほとんどが私の話しを素直に聞き入れ、アドバイスどおりに実践してみようと試みる。このような姿勢を児童の中に育めるような信頼関係を築くことのできる先生方の指導は勉強させていただくことばかりである。しっかりとした授業運営を実施されていることもあり、私が個人的に児童と何かをするという機会は少ないが、その中でも児童と触れ合い、良好な信頼関係を築こうと努力してきた。その甲斐もあり、今では児童もたくさんのかを質問したり、雑談をすることも多くなってきた。約4ヶ月程度しか彼らの外国語活動に携わる時間は残されていないが、学校や先生方、児童と

の触れ合いから多くを吸収して、自分の財産にしたいと考えている。



# ☆ 青少年の居場所 ☆

## 目次

### 同じ目線で参加するということ

英語英文学科2年  
新居 和真

### 勉強だけでなく

電気電子情報工学科科目等履修生  
岩崎 大樹

### 年は違えど演者の意識を

英語英文学科1年  
小川 暁土

## 同じ目線で参加するということ

### 英語英文学科2年 新居和真

青少年の居場所というボランティアに所属して1年が経った。この活動は、近隣の中学生や小学生のバンド活動をサポートするというものである。楽器を演奏する中でできないところやみんなと合わないところと一緒に解決することや、生徒たちと一緒に演奏することなどを行っている。

入った当初から尊敬していて、生徒との関わり方の上手い先輩が卒業してからは、一人で活動先に行っていた。長期休暇中は定期が切れてしまっていたり、予定が合わなかったりで、行けないことが多かった。また、大学生側の体制を変え、月1で活動場所に行くようにしたことから、生徒との関わりが減ってしまった。これらのことから、私は生徒たちや先生方との関わり方がわからなくなってしまっている。個人練習をしている子にどう声をかけるか、グループで合わせたときにどんなアドバイスを、どのようなタイミングでかけたらいいかわからない。また、プロの方に来ていただいているため、間違ったことを言うてはいけないというプレッシャーもあった。このように、先輩が卒業してからの数ヶ月間、思うように活動に参加できない、迷いながら参加しているという時期が続いていた。

だが、わからないからといって、ただ見ているだけになってはいけない、何ができるのかを試行錯誤した。個人練習中に何の曲を練習しているのかを聞き、どんな曲か調べ、子どもたちが個人練習をしている時に自分も曲の流れや感覚を掴んだ。グループ毎に合わせたときに、上手くできているところに正直に「すごい」と感動し褒めたり、自分の聞いたものと違うところや明らかに音やリズムがずれているところを見つけ、どうやって演奏しているのかを訊ね、一緒に原曲との聴き比べをしてみることで発見を見つけたりした。私には、その演奏が上手いのかどうか、どういうミスをしているのかということが原

曲を聴いてみないとわからない。生徒がやろうとしている曲を調べ、聴こうとしたことで手ごたえが見えた。そこからは、何の曲を練習しているのかを事前に聞くようにすることで、みんなとの活動に参加する前に準備をするようになった。

私は歌を歌うこと、音楽に触れることが好きだが、楽器は上手く演奏できない。そのため、私には「指導」はできない。だが、生徒と同じ目線に立ち、「この部分どうやるんだろう」と一緒に考えることはできる。教えることはできないけど、いわゆる「学びあい」はできるかもしれない、と思った。私は入った頃からの活動を、「顧問」のような立場で参加するものだと思い込んでいた。そうではなく、生徒たちと同じように曲を聴き、原曲との差異と一緒に気づく、上手くなるためのコツを一緒に発見するという参加の仕方もあり、「教える」ことが全てではないことを学んだ。このことは、後期になってこの活動に加わった後輩からも学ぶことができた。その後輩は、サークルでギターを扱っているため、ギターが上手であり、活動にも実際に演奏して参加していた。その後輩は入って一ヶ月の悩みを話した。「曲を聴いて、演奏に参加することができているが自分の演奏で精一杯であり、周りが見えていない、周りの子に指導ができていないため自分本位の活動となってしまっている。」と言っていたのである。私はこの参加の仕方はとても生徒たちの活動に良い影響を与えていると思った。先生ではないけど、自分よりも上手な人と一緒に演奏ができるため、ギターを担当している子は良いお手本として見ることができ、他の生徒は上手な人のリズムに乗ることで安定した演奏をすることができる。

このような参加の仕方を見て、また日々の活動に参加する中で思わぬことに遭遇した。それは、ピアノ担当の生徒が他の習い事のためにライブを欠席してしまったのである。その音が無いと、その曲は音が足りず、違和感のあるものになってしまう。そのため、その日観客として来ていた僕は、普段演奏を見ていたという理由でピアノを吹くことになった。直前に練習する時間があつたため、生徒たちに演奏してもらって合わせたり、どんな音であつたか生徒たちに聞いたりすることで本番までにできるようにし、演奏は成功した。日々の練習、唐突のライブ参加等を通じて、ライブを設けることで目標をも

って活動できるということ、「生徒の演奏を作る」のではなく「生徒と演奏を作る」ことの二点が大切であることを学んだ。これから、1月28日に行われる大きなライブに向けて、生徒と同じ目線に立って頑張っていきたい。

## 勉強だけでなく

### 電気電子情報工学科科目等履修生 岩崎大樹

人生、果たして勉強だけで幸せになることはできるのだろうか。このことを、青少年の居場所を通して強く感じるようになった。幸せというと、やりがいのあることを行っているかどうかだと考える。仕事や趣味、家族や友人とのことなど、その人が何かしらのやりがいを感じていれば、その瞬間だけは「最大の不幸」という状態ではないだろう。青少年の居場所で行っているフットサルやバンド活動も、仲間たちと漠然と活動をするのではなく、やりがいを持って取り組めるかどうかが重要な点である。このために自分が行っているのが、子どもの課題を明らかにし、必要な手助けを行うことである。バンド活動でのやりがいは、楽器が上達し、仲間と協力して楽しく演奏が行えることであると考え。しかし、バンド活動では、子どもたちが自分の課題に気づくことが難しい。それは、楽器はサッカーボールや野球のバットに比べて、普段から触れられる機会が少ないからである。ドラムなど据え置き型の楽器についてはそもそも自前の楽器を持っている子ども自体が少ない。子どもたちは、基本的に青少年の居場所ですら思い切り演奏することができないのである。この少ない練習の中で、子どもはやりがいをもって活動する。そのために、音が小さかったり遅れていたり、上達のために何が足りていないのかを子どもと共有し、そのために必要な練習方法を提案している。

青少年の居場所のなかで、一人のドラム担当の子どもがいる。彼とは活動を始めた頃から一緒に活動を行っているが、彼は人から言われたことに少しだけ抵抗感を見せる子なのだ。活動を始めて最初は楽器の話をしようにしても、自分でできるから、という雰囲気サポートがあまりできなかった。しかしある日、楽譜の読み方について他の子どもと話して

いると、彼がこっちを見て話を聞いているのだ。このことから、実はとても興味があるのだなと感じ、その後少しずつ楽器の話を増やしていった、一回だけ、具体的なコーチングを行うことができた。それは半年前のことで、「よかったらその練習しばらく続けてみて」と軽い感じで言ったが、彼はその練習を半年続け、最近では目に見えて上達しており、楽しそうに演奏している。

自分のこれまでの人生の中で、やりがいを持って行ってきたことは、覚えていることが多い。子どもたちがこの活動にやりがいを感じ、その後の人生の宝になるようなサポートを今後も行っていきたい

### 年は違えど演者の意識を

#### 英語英文学科1年 小川暁土

僕がボランティア活動を始めたのは10月のことです。最近ようやく空気になじめてきた実感が出てきた中ではありますが、いくつか気付いたことについて記したいと思います。

僕は主に中学生バンドのサポートギターとして一緒に練習に参加させてもらっています。そのため、他の大学生とは違った形で中学生と関わっています。だからこそ、僕の視点からだけ見えてくることもあると思っています。

僕が一つ大きく感じたこととして、中学生は大人の接し方で動きや姿勢が大きく異なってくるということがあります。僕は幸い中学生たちによく受け入れられているようで、僕が「やろう」と声をかけるとみんな合わせる姿勢に代わってくれます。ですが、声のかけかたによって、例えばダメ出しから入ってしまったりすると、本人たちも気分が乗らず、なかなか練習を始めないということになってしまいます。僕のこのボランティアでの役割は中学生たちにいい刺激をもたらすこと、そしてそれによりもたつきがちなバンド練習をしっかりとテンポよく行うようにしていくことだと思っているので、これからも中学生たちとうまくバンドを続けていけるように声の掛け方や、練習の進め方を工夫してやっていきたいと思っています。

僕はこのボランティア活動をしている一方で、学内の軽音部にも所属しています。この二つを掛け持ちしている中でもう一つ気づいた点として挙げるな

らば、まだ中学生たちはプレイヤーとしての性格が出ていない、という点があります。自分の部活には、ハードロックが好きな人や、アニメソングやボーカロイドの曲が好きな人、ヒップホップが好きな人などみんな音楽のこだわりが強くなります。僕自身もロックンロールが好きで、また自分の部活のそういった個性が強い部分がとても好きです。自分の好きなジャンルを突き詰めて懂れているプレイヤーの演奏や動きをコピーする。それを続けていくことにより、それぞれが単なる弾き手からもう一つ上の段階にステップアップできると思います。これからのボランティア活動では、この「プレイヤーとしての性格を培う」というところを中学生たちに教えていきたいです。

このように、一バンドメンバーとして関わっている自分だからこそ気付ける点があるのでこれからも中学生たちをリードしつつ他の大学生には気付けないことを見つけ、アドバイスしていきたいです。



# ～JIN-KANA学習塾～

自分の課題を認識すること

電気電子情報工学科科目等履修生 岩崎大樹

距離を縮めてから学習へ

自治行政学科 4年 栗原涼子

自信につなげる授業

経済学科 4年 小林未来

感覚と理論

経済学科 4年 山梨優

できることをひとつひとつ

英語英文学科 4年 貝原光太郎

卒業した先

英語英文学科 4年 原亜由美

生徒の質問から学ぶ

英語英文学科 4年 三浦篤史

「俺でもできる」って気づいてほしくて

英語英文学科 4年 吉田真悠子

自信を持つこと

機械工学科 4年 小林和貴

モチベーションを保つ

電気電子情報工学科 4年 内田皓大

共に成長

電気電子情報工学科 4年 宮田修斗

一緒に学ぶ相手がいること

物質生命化学科 4年 霜島美穂

工夫することの大切さ

自治行政学科 3年 河内咲慧

JIN-KANA学習塾との出会い

英語英文学科 3年 太田凜二

生徒に気づかせること

人間科学科 3年 太田健人

生徒と共に

人間科学科 3年 林祐太

これからの課題・わかることの喜び

英語英文学科 2年 村上夏月

生徒が成長するために

総合工学プログラム 近藤恵都

相手の気持ちを考える

法律学科 1年 佐藤郁弥

共に成長する時間

法律学科 1年 時田和哉

JIN-KANAで見た教師像

経済学科 1年 小見川恭輔

生徒の目線で考えたこと

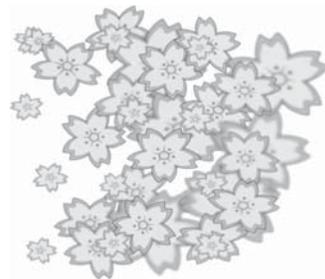
英語英文学科 1年 石川彩乃

成長するための支援

英語英文学科 1年 オカダヒトシ

生徒から学んだこと

英語英文学科 1年 水野紗愛



## 自分の課題を認識すること

電気電子情報工学科科目等履修生 岩崎大樹

現在、確かな学力を育成していく必要がある。それは、知識や技能のほかに、意欲を持って学び、課題を発見し、解決していく力の重要性が高まっているためである。そのために、向上心は大事である。向上心を持って学習に取り組むことができれば、漠然と取り組むよりも定着に大きな差が出る。学ぶことを把握できれば、足りていないことも見えやすい。そこで、子どもと一緒に学習を行う上で、今日学ぶことの全体像を掴むところに重きを置いて学習を行っている。

A.K.さんとは一年ほど一緒に学習を行っている。入塾当初、彼は数学の途中式を全く書かなかったり、分数の約分ができなかつたり、基本が抜けている生徒であった。しかし、学習には毎回集中して取り組む生徒であった。彼と学習を始めて、分数など基本の学習をしっかり行う必要があった。しかし、分数は小学生の範囲であり、小学生の範囲の学習を行うことでA.K.さんのモチベーションに影響が出ないか不安があった。しかも、なかなかできるようにならず基本事項ばかり学習し、中学校で学習している内容にもついていけないということは避けたい。そこで、分数だけを一時間全て学習するのではなく、中学校の学習を行いながら、分数で躓いたときのみ分数の学習を行うようにした。A.K.さん自身が、分数の学習を行う必要があると感じれば、分数の学習によるモチベーションの低下を改善できるのではと考える。さらに、間違えた瞬間は、自分が何ができなかったのかと具体的に理解できているので、学習がスムーズに行える。こうした学習方法を継続して行った結果、現在A.K.さんは分数が苦手ではなくなっている。

その他では、宿題の出し方に気を付けている。彼は自宅で学習をしないタイプで、JIN-KANA 学習塾で宿題を渡してもやってくることは少なかった。途中から、無理に家でやらなくてもいい、という方向性に変更した。しかし、JIN-KANA 学習塾の学習時間だけでは足りないという事実もある。JIN-KANA 学習塾には、生徒が来塾し学習を始めるまでに最大で三十分程度の時間がある。そこで、その時間に宿題をや

ることにした。宿題の量は、十五分程度でできるものにし、出題数は一題～三題にした。すると、早めに来て宿題をやるようになったのだ。もともと常に集中して学習する生徒であったが、早めに来て勉強するという習慣になったことで、「塾では勉強」というようになり一層集中して学習に取り組むようになった。定期試験の前などは、危機感があるのか自宅です宿題を行ってくることもあった。現在は、家で少しやってきたり、早めに来てやったりなどしている。継続してモチベーションを保ち続けるためには、生徒の学習スタイルを探し続けることが大事である。良い教材準備をしても、学ぶ本人に学ぶ気が無ければ効果が薄い、というのは当然である。子どもが無理せず集中して学習できるよう、学習の形を押しつけない学習を行っていききたい。

## 距離を縮めてから学習へ

自治行政学科4年 栗原涼子

JIN-KANA 学習塾の活動を始めてから3年が経ちました。この3年間の活動を振り返るととても懐かしい気持ちになります。活動を始めた頃は生徒とどのようにかかわればいいのか、学習の進め方など不安に思うこともありましたが、今でも生徒とかかかわるときは、緊張感をもって接していますが、とても楽しく活動することができています。また、JIN-KANA 学習塾では学習以外の活動も行っています。夏にはキャンプを行い、普段の活動の中では見ることができない生徒の一面を見ることができました。

私は中学3年生のY.M.さんの英語の学習を担当しています。初めてY.M.さんを担当したときは、聞いたことにもしっかりと受け答えができる大人びた生徒という印象を受けました。最初はただ学習に取り組んでいるだけでしたが、徐々にJIN-KANA 学習塾にも慣れていき話をする機会も増えていきました。今では、Y.M.さんの方から学校の話や自分のことなどを話してくれるようになりました。笑顔も増え、楽しく学習を進めることができています。私とY.M.さんの距離も少しずつ縮まっていると感じ、嬉しい気持ちになりました。

英語の学習では、できる問題を増やし、自信をもって学習に取り組めるような学習を心がけました。

学校の教科書の内容を中心に学習し、1・2年生の復習も行いました。Y.Mさんはその場での理解力はありますが、内容が定着するのに少し時間がかかる生徒でした。そのため定着を図るためにも学習の始めは前回の復習から入り、間違えた問題は繰り返し解くことで間違いを減らしていきました。少しずつ解ける問題も増えていき、自分の力だけで問題を解けるようになっていきました。現在は2月の高校入試に向けて学習をしています。入試の学習を進めるにあたり、Y.Mさんと話をしました。その中で目標の話になり、Y.Mさんから「テストで満点をとりたい!」という発言がありました。私はこの言葉から学習に対するやる気を感じました。学習をする中でも、単語を覚えようと努力し、わからないところは積極的に質問してくるなど一生懸命に取り組んでいます。私も頑張っているY.Mさんのためにもしっかりとサポートを行っていきたくと改めて思いました。今後、入試が近づくにつれて焦りや不安な気持ちになってしまうかもしれないので、そのときはY.Mさんの気持ちを和らげていければと思っています。

今年度の活動も約3カ月になりました。生徒とかかわる時間を大切に、残りの時間を過ごしていきたいと思います。

## 自信につなげる授業

### 経済学部4年 小林未来

私が担当しているS.Aさんは、とても学習意欲が高く、受験勉強にも自分から積極的に取り組んでいます。彼女は、2人の姉の受験を目にしてきました。彼女自身お姉さんの苦勞を知っています。だから彼女は中学3年生になってから常に受験を意識して、学校の授業にしっかり取り組み、提出物・テストなど自分にできることをコツコツ積み重ねてきました。私からすると、立派でありよく頑張っていると思います。しかし、彼女は決して満足することなく毎日努力を続けています。時に自信をなくし、とてもマイナス思考になってしまう姿も見えてきました。どれだけ褒めても、どれだけ丸がついても彼女は満足することではなく、「できるようになったよ!」などの言葉を彼女から聞いたことは一回もありません。どうしてそんなに不安なのかを聞くと、「周りはいっと頭

がいい。」「もっと頑張っている。」「塾で勉強している。」などの言葉が返ってきました。確かに、彼女は学力優秀なわけではありません。でも、「努力を彼女にも認めてもらい、結果につなげてあげたい。」と強く思うようになりました。彼女の希望の範囲で学習を行い、テストで1点でも多く点数を取れるようにと思い、彼女にとって少し難しい問題に取り組みました。しかし、このやり方は彼女の自信を更に無くしてしまいました。わからない問題ばかりで、自力で解けない上に、正答が少ない学習をしてしまいました。学習の中で「わかった」と思えることを1つも残せませんでした。その日初めて、「もう数学やりたくない。もう無理。」と言われました。その後、私はどう声をかけていいかわからず、どうにか元気になってほしいと思いましたが、その日は彼女の笑顔を見ることができませんでした。今回の授業は大失敗であり、私自身間違ってしまったことはわかったが、どうしていいかはわかりませんでした。先生方に相談をして、あなたが焦ってどうするの?と声をかけていただき、私は彼女の気持ちに答えてあげたい気持ちでいっぱいでした。大事なことを見失っていました。私が彼女にしてあげなくてはならなかったことは、「彼女の不安や焦りを少しでも取り除いてあげること」ということに気づくことができました。私も一緒に焦ってしまっただけではダメだと気づき、次の授業で彼女に謝りしっかり自分の気持ちを伝えました。それからの学習は確実にできる問題を繰り返し行い、正答が続くことで彼女にも笑顔がだんだん戻ってきました。その後は、彼女のペースで彼女のレベルで学習を進めていくことができています。彼女の自信に少しずつ繋がり、「まあまあできるようになった」など少し前向きな言葉が聞けるようになりました。そして、受験に関わる最後のテストが終わり、彼女の目標点には届かなかったが、1学期から比較してみると、全教科点数が自己最高点で終えることができていました。本人はもちろん私も本当に嬉しかったです。私はこれからも彼女を支えながら一緒に成長し、次は志望校合格という彼女の目標に向けて学習を進めていきたいと思っています。彼女が入試当日自信を持って臨めるようにサポートしていきたいです。そして、私の最大の目標は、彼女が高校生になっても数学に自信を持てるような姿で送り出してあげたいと思います。

## 感覚と理論

### 経済学科4年 山梨 優

私はボランティア活動を通じて様々な課題に直面してきました。支援の方法やタイミング、言葉の壁、生徒との距離感など今でもはっきりとした「正解」にたどり着いていないものばかりです。しかし、これらの課題と向き合う中で私は多くの経験値を得ることができました。これは教員としての道を歩んでいく上で非常に重要なものだと思います。今年度のJIN-KANA 学習塾の活動においても様々な経験値を得ることができました。そして、その中でも私が一番課題意識を持ち取り組んだことが感覚と理論についてです。

夏休み明けより昨年度にネパールから来日した K.B さんと学習をしてきました。K.B さんは学習へ対する意欲がとて高く、色々なことに興味を持つことができる生徒です。来日当初から日本語に対する学習意欲がとて高く、今では友達と変わりなく漢字を使いこなすことができます。しかしながら、その裏側には彼の絶え間ない努力があります。普段の授業でわからなかった漢字や言葉は全て教科書に印をつけ、自宅に帰り読み方や意味を調べ、教科書に書き込んでいます。そのため彼の教科書は誰よりも余白が少なく、誰よりもボロボロです。そして1週間の間で調べてもわからなかったことを JIN-KANA 学習塾へ持ってきて私と一緒に学習しています。そのため彼との50分間は、時に3教科の学習になることもあります。漢字の読み方から数学の計算、雲の書き方や化学式など様々な教科の幅広い範囲です。一緒に学習する上で私のわからない範囲も沢山あります。そんな時に私が大切にしていることが、共に学ぶことです。自分自身がわからないことは、はっきりとわからないと伝え、教科書や資料集、辞書を使って調べることで彼と一緒に学習します。

また、その中で私が意識していることが感覚と理論を使い分けることです。これはK.B さんだけでなく JIN-KANA 学習塾で支援している全ての生徒との学習の時間も同様です。生徒一人ひとりに得意や不得意があり、理論を説明することで納得できる場合もあれば、理論が全くわからず感覚的に捉える方がわかりやすいという場合もあります。K.B さんの日本

語力の成長は著しいものですが、一方でまだまだ言葉は学習においてとても大きな壁となっています。したがって、少しでも理解しやすい学習方法を考えなければなりません。そこでカギとなるのが、彼の得意不得意や理解の仕方に合わせて感覚的に理解することと理論的に理解することを使い分けることです。具体的な例としてはK.B さんとの理科の学習があります。高気圧と低気圧の学習をした際、いつもなら理論をすぐに理解することができますが、この時は全く理解できませんでした。もちろん、日本語の意味が難しかったということも考えられますが、いつもの日本語がわからない時のリアクションとは少し違う雰囲気でした。教科書や資料集を繰り返し読んでも理解できなかったため、ジェスチャーを使ったり、絵と一緒に描いたりしました。すると、彼は少しずつ仕組みを理解し始めました。そして授業の終わりには理論をしっかりと説明することができるようになっていました。この時に私は、指導を行っていく過程において、はじめから理論を理解できるように学習すること、感覚的に理解すること、最終的に理論を理解できるように学習することを場合に依じて使い分けることが非常に重要であると感じました。これは他の生徒との学習においても効果的であると実感する場面が多々ありました。他の課題と同様に、この指導方法が「正解」かどうかは私自身わかりませんが、K.B さんとの学習においてはとても有効だったと私は思っています。

来年度はK.B さんを支援することができませんが、代わりに担当してくれる仲間へ彼との学習の記録を共有することで、彼が希望する進路へ進めるよう最後まで努めていきたいです。

JIN-KANA 学習塾での活動は、私自身をとて大きく成長させてくれました。助言をしてくださる先生、共に学習した生徒、そして最善策を真剣に議論してくれる仲間。関わってくれた全ての人に感謝しています。ここで得た経験値を生かし、これからも成長し続けていきたいと思えます。

ABCDE  
FGHIJK  
LMNOP  
QRSTU  
VWXYZ

## できることをひとつひとつ

### 英語英文学科4年 貝原光太郎

私が JIN-KANA 学習塾の学習支援活動で担当している中学2年生の男の子 T.S さんは忘れ物や失くしてしまうものが多く、学校でも提出物をせっかく終わらせたのに提出するのを忘れてしまったり、失くしてしまったりすることが多いようだ。学習面においては取りこぼしが多いえに、一度やったことがなかなか定着しづらい彼であるが、どこか弟のように「かわいい。」と感じている。不器用ながらも一生懸命学習に取り組む姿勢や、わからないことも「なんだっけ？なんだっけ？」と、なんとか思い出そうと努力する姿をおよそ半年間隣で見てきた。「なんとか彼ができることを小さなことでも増やしてあげたい！」と、ゆっくりゆっくり同じことを何度も何度も繰り返して行ってきた。

彼がおよそ半年前に JIN-KANA 学習塾にやってきたとき、どこか不安な表情で「英語できないんです。」と言ってきた。緊張を和らげようと、あえて“Hello. My name is Kotaro Kaihara. How are you today?” と英語で尋ねると、そのままフリーズしてしまった。“What is your name?” と名前をローマ字で書いてもらおうと紙とペンを渡すと、自分の名前がローマ字で書けないようで再びフリーズ。「ゆっくり一緒に書いてみよう！」と一緒に彼の名前を何度も書いた。はじめでの出会いは彼にとってかなり苦しい思いをさせてしまった。私はローマ字を毎回の活動で帯学習として扱った。読ませたり、書かせたりして何度も行うがなかなか定着しない。自分で書いた字が読めないことや、「MygrandmotherlivesinOkinawa」のように単語と単語の間がつながってしまったり、ピリオドが抜けてしまったりすることがある。「これなら彼はできるだろう！」と、教材準備の段階で勝算を持って用意した教材も彼がフリーズしてしまうことが多く、私自身もどかしい思いの日々であった。

そんな彼と根気強く学習を進めていくと最近小さな変化が起きてきた。「学校の宿題やってもいいですか？」と持ってきたプリントを見ると、単語と単語の間がきちんと空いており、ピリオドも打ってある。続きをやるたびに様子を見てみると、何も言わなく

でも単語と単語の間が空いてきた。さらに驚いたのは、be 動詞現在形の復習を行ったとき、自分の名前をゆっくりではあるがきちんとローマ字で書くことができた。「すごいじゃん！じゃあ貝原さんの名前書ける？」と言うと、「えー？か、か、k、a、い、い？i だ！」とゆっくりではあるが書ききることができた。そのあと、「ピリオドも単語と単語の間もナイス！前より字もきれいだし、ローマ字も書けるようになってきたんじゃない？」と言うと、「そうかなー？」と少し照れた様子で続けた。その直後の問題でいきなりピリオドを忘れてしまい、「今さっき褒めたばっかなのに！」「あ、やべー。」と一歩やっとなんだと思ったら、また一歩下がってしまうような生徒だけど、確実に成長の軌跡を見ることができている。彼にとってできることをほんの小さなことでも、少しでも増やしていけたらと思って活動を臨み共に頑張っている。

彼の様子は中学校 AT でもたびたび見ることがある。不器用でありながらも一生懸命で、周りに対しても優しく、愛されている人柄である。JIN-KANA 学習塾で彼にとってできることをひとつひとつ増やしていくことはもちろんのこと、彼が持っている彼しか持っていないような能力や、興味・関心も大切に伸ばしていきたい。彼が「楽しい！」と思える JIN-KANA 学習塾の活動を創っていき、共に笑い、共に楽しみ、共に成長していきたい。

## 卒業した先

### 英語英文学科4年 原亜由美

今年の4月にジンカナ学習塾を初めて、8か月が経ち、3年生の受験勉強が本格化してきました。4月に私がジンカナ学習塾を始めるきっかけになった中学校3年生の K.M さんを担当していく中で、生徒が卒業した後について考えるきっかけになりました。今月に入ってから進路先が決定し、他のみんなが受験勉強を進めていく中で、K.M さんは通信制の高等学校を選択したため、受験のための勉強ではなく、高等学校に入学した後に困らないように中学校の勉強を進めていくことになりました。私の中で、11月に入ったころから K.M さんはいままで以上に勉強に向かうようになったと思います。最初はだるい、ね

むい、いやだ、やりたくないなどネガティブな発言をしながら勉強をし、10分間頑張ったら残りはお話になってしまう。状況でした。しかし、最近では、ネガティブな発言も減ってきて、勉強も50分間行うことができる日が増えているように感じます。それは、彼女の成長をとでも感じたシーンでした。また、一度だけです学校にも決めた時間に来ることができたので、今後も続けていけたらいいなと思っています。

私自身、最近、K.Mさんがジンカナ学習塾や学校を卒業し、高等学校に入った後のことを考えることが多くなりました。「通信制の学校は登校しない場合には、課題を出さないと卒業できない」と聞きました。K.Mさんはしっかり学校に行けるのかな、自分1人で勉強できるのかな、卒業できるのかななどと不安になります。今のうちに、卒業した後でもある程度自分で勉強できるようにしていきたい。と思っても、なかなかそれを実践する方法が思いつきません。また、卒業してしまえば関わりもなくなってしまいます。今、K.Mさんの卒業後に向けて何ができるのか考えながら、これからもJIN-KANA学習塾を行っていきたいと思います。また、実際に教員になった際にもこのような場面に遭遇すると思います。自分の中で、どこまで生徒に関わり合っていくことができるのかを理解し、区切りも付けられるようにもなりたいと思います。

### 生徒の質問から学ぶ

#### 英語英文学科4年 三浦篤史

2017年度のJIN-KANA学習塾(以下JIN-KANA)では、昨年度までとは異なり、中学1年生から3年生まで一緒に学習を進めています。今年度はJIN-KANAで最上学年になり、他の4年生と活動を引っ張っていく立場になりました。JIN-KANAでの活動をよりよいものにするために試行錯誤し話し合いを重ねてきました。

私は今年度中学一年生と一緒に英語の学習をしています。彼は入塾当初から多くの学生と話をする生徒でした。また英語に対して苦手意識はあまりなく、英語の音を声に出そうとする生徒でもありました。そのため私は彼と一緒に「英語を音から学ぼう」と

提案しました。その後、彼とともに新出単語を学習する際には、音から意味、そして文字の順番で学習するようになりました。そのように学習を続けていると、挨拶を英語で行ったり、簡単なやり取りを英語で話したりできるようになりました。

10月末になりテストに向けて勉強を始めたとき、英語を「話す・聞く」ことはできるが、英語の問題を解くことができないことが多々ありました。今まで英語を音中心で学習していたために、「書く・読む」ことができないのかと考えました。そこからは「音声」よりも「文字」を中心に学習を始めました。しかしそのテストの点数は、上がりはしたがそこまで大きな変化があったわけではありませんでした。そのためこれからの学習についてどのような方法が良いのか悩むようになりました。しかしその悩みは生徒の質問からヒントに気づくことができました。三人称単数現在形のsを学習している際、「なんで、“reads”の“d”は発音しないの？」と質問がありました。その質問に、音声と文字を組み合わせることで生徒の興味・疑問を生むことができ、生徒のより深い理解につながると気づかされました。その時まで私は音と文字とのつながりをあまり重視していませんでした。しかし、この生徒の質問があった後、文字を意識しながら音を学習する、そして音から文字を学習することを行うようにしました。ただ英語を音から学習すればよいのではなく、音から文字への連結を上手に行うことが大切だと生徒の質問から学ぶことができました。

生徒が成長できる、そして私たちは生徒から学ぶことを通して、共に成長できるJIN-KANAの活動は、私にとってとても大切なものです。今後は、生徒の一つ一つの質問・疑問を大切に、それを解決できる手助けができるよう、寄り添いながら学習を行っていきます。今年度の活動も残すところあと3ヶ月となりました。残り少ない期間もより良いものにするために一生懸命日々の活動に取り組んでいきます。



## 「俺でもできる」って気づいてほしくて

### 英語英文学科4年 吉田真悠子

私がT.Yさんと初めて会った場所はここ JIN-KANA 学習塾ではありません。T.Yさんは、私が教育実習で授業を担当していた学級の生徒の1人でした。彼の学校での生活は「優等生」「真面目」とはかけ離れたものでした。先生から褒められている姿は見たことがなく、「叱られてばかりいる」という印象でした。

彼が入塾すると知ったとき、教育実習中に「T.Yさんに対してなんでそんなに怒るのかな？良いところもあるのに。」そんな疑問を感じたことを思い出し、「たくさん褒めてあげよう。」そう決心し担当することを希望しました。

T.Yさんには親以外で味方になってくれる大人が必要だという想いから、あまりいいことではないのは重々承知で、「学校の先生をギャフンと言わせようよ？一緒に頑張ろう。」という話をしました。それから今日まで“提出物を出すこと”と“ノート作りをすること”を目標と一緒に頑張ってきました。

彼はとにかく話が好きでどう見ても勉強が目的ではなく話しをするために来ているような生徒です。でも、今はそれでもいいと思っています。初めのころは授業の8割はお話でしたが、最近では話が脱線するたびに、「じゃあもう今日はこの話聞いたらお話しね！」という「わかったよ、あとでいいや。」と、ニヤリとしながらノート作りを続け飽きたころにまた話しかけてくるようになりました。少しずつ50分の中で学習と世間話のメリハリがつけられるようになってきたと思います。彼は「授業を聞いてもどうせわからないから聞かない」というタイプの人間でした。だから、JIN-KANA 学習塾では予習をし、少し理解した上で授業に望む流れを作りました。その結果、「1tousand …、これいくらかわかるか？」という質問に、誰もわかっていないのに真っ先に答えて驚かせることができたそうです。

さらに、先日初めてノートとテスト直しが提出できました。ノートに押印と23/39という先生の字を見たときには本当に嬉しくて5回もハイタッチしました。その日のコメントシートには「あっちの先生をぎゃふんと言わせた。学校でもノート作りががんばる。」と書かれていて、自分のやり方は間違えではな

かったと実感できました。

彼は人懐こい分、周りの人にすぐ話しかける癖があります。それは悪いことではないが、彼には「話すべき時」と「話してはいけない時」を見極めることが必要です。それを彼自身に感じ取ってほしいです。注意するべき時はもちろんその場で注意しますが、緊急を要さないことには彼自身に気付かせようとして、気づくまで待ちます。

私は、彼に自分でもできると思っしてほしいです。彼は怒られすぎていてどんどんやる気を失っています。それを少しでも取り除きいていき、一緒に「できる」を増やしていきたいです。

## 「自信をもつこと」

### 機械工学科4年 小林和貴

昨年度の7月からこの活動に参加している。昨年度も生徒を見る機会があり多くのことを学べたが、今年度は1年を通して生徒の成長を見ることができた。

4月から中学3年生のM.Rさんの数学の学習をサポートしている。よく「ふつう」という言葉を使う生徒で、学校はどう？と聞くと「ふつう」、数学は好き？と聞くと「ふつう」と答えていた。バスケットボールは特別らしく、「楽しい」と答えていた。今後の学習を進めていくうえで、なにか本人の目標を決めたいと思い、M.Rさんに聞いたところ「テストで50点がとりたい」とのことだった。4月の時点の学力は中学1年生の内容の正負の数がわからない状況だった。だが、迷いなくこの目標を口に出したので、私も全力でサポートしようと考えた。

まず初めに、数学で必要になる基礎力を固めることにした。また、3年生の学習に関わってくる1・2年で行った学習のおさらいを徹底した。学習する際に数問に一度どのように解いたかを聞くことで、ただただ作業で終わらせず、理解し定着することを目指した。この活動が特に大きな影響を与えたのは、自分自身で間違いに気づき、直せるようになったことである。自分で説明する中で間違いがあると途中で気づき、直すことができるようになった。基礎は毎回確認し、3年生の学習に必要な基礎力を最低限学習した後はできる限り早めに3年生の内容に入っ

ていった。しかし、夏休みに入るまでのテストでは、20点に行かない結果だった。

夏休みが明けるところには JIN-KANA 学習塾のキャンプに行くなどをしたためか、学校のことなどいろいろ話してくれるようになっていた。学習面では、学校と同じ範囲の学習を進めていた。また、学校の定期テストで出されそうな問題をいくつかピックアップして何度も復習を行った。ある日の JIN-KANA 学習塾で本人が嬉しそうに周りの友達に問題の解き方を教えたと言ってきた。どうやら JIN-KANA 学習塾での学習が学校よりも先に進んでいた部分があり、それを友達に教える機会があったとのことだった。そのことを話す顔は自信満々でとてもうれしそうだった。そのあとからか、問題を積極的に解くようになり、また、正答率が増えていった。簡単すぎるのかと思ひ難しくもしてみるが、基礎問題はすらすらとできていた。生徒の自信がこれほどまでに勉強に影響を与えるのかと驚くばかりだった。その結果もあってか、単元テストで3割を超える点数を取ってきた。本人としては50点とれていないことに満足していない様子だった。

最後の定期テストでは、結果からいうと50点を越えることができなかった。少しひねった問題が多く、うまく解けなかったとのことだった。本人としても悔しかったとのことだった。成績も上がることはなかった。しかし、4月のころに聞いた数学は好き？という質問の答えは「少しだけ」にかわっていた。

12月に入り、入試に向けての勉強が始まった。本人の気合も十分あり、基礎力がついてきたためか、問題を理解するスピードまで上がってきている。最近では「余裕です」という場面が出てきている。今回の入試の目標は、60点と本人が決めた。自分自身のやれることをして、全力で生徒を支えられたらと思う。

1年間を通して生徒の成長を見られたことはとても大きかったと思う。特に、自信と基礎力の大切さを身に染みてわかった。今後、教員を目指すあたり生徒のわかるを増やし、少しでも自信を持てるよう行動していきたい。

## モチベーションを保つ

### 電気電子情報工学科4年 内田皓大

私は9月からY.Sさんの学習支援をしています。とても明るい生徒で話しやすく、数学も基本的な計算はできています。しかし、彼女は数学の中で文章問題が苦手で、分からない問題があると表情が一気に悪くなります。そうすると、その後のモチベーションが低くなり、普段なら解けるような問題でも瞬時に「分からないや」と諦めたり、計算ミスをしやすくなります。そのため、彼女の学習支援をするときは、いかにモチベーションを保つかが重要となってきます。

モチベーションの維持として行っていることが、苦手そうな問題や難易度の高い問題は少しずつ取り組んだり、分からない時の声かけを注意したりしています。具体的には証明の問題が苦手なため、比較的に相似条件の見つけやすい問題を取り扱ったり、穴埋め問題に変えたりしています。また、問題の出し方も連続して証明の問題はやらないようにしています。分からなくて焦っていたり、イライラしているときは少し大きめに「この問題できるのは難しいから数学がすごく得意な人ぐらいだよ」と安心するような声かけをするように心がけています。

最近、期末テストが返ってきました。以前はテストを見せるとき、かなり表情が悪く落ち込んでいましたが、今回は違いました。前回よりはできていて一生懸命やった所は○がもらえていました。彼女が「この問題は合ってたんだ！」と言って見せてくれた問題は、最初は分からず何度もやった問題だったので私もうれしかったです。これから入試なので、彼女のモチベーションの維持・向上をしつつ支援を行いたいと思います。

## 共に成長

### 電気電子情報工学科4年 宮田修斗

「子供が好き」それが僕が教師になりたいと思っただけです。数学が好きで、人と話をするのが好きです。そのため、高校生の頃に自分は教師に向いているのではないか思っていました。しかし、

その時はまだ先のことだと思い深く考えていませんでした。大学に入学して進路のことを考えたときに、自分は生徒に教えることができるのか、本当に教師に向いているのか不安でした。そこで、大学二年生の時に、実際に生徒と関わり勉強を教えることのできるJIN-KANA学習塾を始めました。活動を始めて二年が経ちました。JIN-KANA学習塾では、生活困窮家庭の中学生を対象に主に一対一の個別学習支援を行っています。毎週2回の生徒との活動が私の一番の楽しみです。

今年の3月からT.Tさんを担当しています。T.Tさんは、とても素直で明るい生徒です。初めてT.Tさんの数学を見たときに、数学のセンスのある生徒だと思ったことを覚えています。しかし、T.Tさんの二年三学期の数学の成績は2でした。そこで話し合い、目標を数学の成績を2から4にあげることに決めました。そのために、授業中の発言を増やすことと、試験で点数を取ることが必要という話をしました。まず、授業中に積極的に挙手できるように、JIN-KANA学習塾では予習を中心にした学習をすることに決めました。そして、私の数学指導のテーマでもある「言葉で説明できる数学」も授業中の自信をもった発言につながると考えました。また、自分の解答を言葉で説明することで、知識の定着と自分の考えを整理することができるため、試験の点数アップにもつながると考えました。そのため、問題を解くたびに声に出してどのように考えたかを説明するという活動をしました。その結果、三年の二学期の成績で数学の成績が2から4に上がり目標を達成することができました。T.Tさん自身も「数学の成績が上がったことが一番うれしい」と言っていました。今回成績が上がったことは、T.Tさんと二人で頑張ってきたことの成果が出たような気がして、とてもうれしかったです。T.Tさんは、私が出す宿題を一度も忘れたことがありません。授業中にも、集中して学習に取り組んでいます。今回の目標達成は、T.Tさんが一年間努力してきた結果だと思えます。生徒の成長に関わることができて幸せに思います。次の目標は、志望校合格です。その中で数学の目標点数を生徒と話し合い、70点に決めました。これから入試まで、生徒と目標に向けて頑張ります。JIN-KANA学習塾を始めて、何人もの生徒を担当しました。その中で、自分の数学教師としての目標が決

まりました。それは「数学の苦手な生徒に数学を好きになってもらうこと」です。そして、この活動を通して教師が生徒の成長を一番近くで見守り、支えることができる素晴らしい職業だと実感しました。一人ひとりの生徒との関わりを大切に、私自身も一緒に成長して自分の理想とする教師になります。

## 一緒に学ぶ相手がいること

### 物質生命化学科4年 霜島美穂

JIN-KANA学習塾の活動を始めて10ヶ月が経ちました。この活動を通して、生徒と一緒に学習したり、様々な話をしたりすることは、私の楽しみになってきました。

私は中学3年生のY.Mさんの数学を担当しています。Y.Mさんは集中力や理解力が高く、難しい問題にも向き合うことができる生徒です。また、疑問に思ったことをそのままにせず、深く考え理解しようとする姿が多く見られます。初めて見た問題も、自分が持っている知識を使って解こうとする努力が見られます。しかし、平方根の計算や相似な図形の辺の長さを求める問題など、1・2年生の知識が定着していないためミスが起こります。私は、学習支援をするとき、2つのことを意識することにしました。

1つ目は、計算につまずいたときに何学年のどこでやったかを明確に伝え、その場で類題演習をし、次の学習で必ず確認することです。これを行うことでいつの知識が曖昧なのかをはっきりさせ、1年生から3年生までのつながりを意識してもらいました。Y.Mさんは平方根の加法と乗法が曖昧になっていましたが、だんだんとミスをするものが減ってきました。

2つ目は、疑問に思うことや納得できないことは必ず確認することです。問題を解く上でモヤモヤしたまま次に行かず、きちんとした理解をしてから進むようにしました。Y.Mさんと一緒に学習するようになってから、この確認は大切なコミュニケーションになっていました。以前、Y.Mさんに「真剣に私の話を聞いて話してくれるから、話をちゃんと聞く気になるし話していて楽しい。」と言われたことがあります。問題を解けたからといって疑問が無いわけではありません。そして、その疑問を言うことがで

きるかは信頼関係が築き上げられているかだと思っています。最初は私の方から何か疑問はないか聞いていましたが、今ではY.Mさんからそういった質問をしてくれるようになりました。

JIN-KANA 学習塾だけではなく、「教えること」には必ず相手がいます。その相手によって伝えなければならないことは違いますが、相手の疑問やできないことに対して真剣に向き合い、導くことは大切なことだと以前より一層強く感じました。そして、信頼関係が生まれた後の学びはとて深いものになることがわかりました。一緒に学び続けてくれる相手に感謝しながら学ぶ努力を続けていきたいと思っています。

## 工夫することの大切さ

### 自治行政学科 3年 河内咲慧

私が JIN KANA 学習塾の活動に参加してから、約8か月が経とうとしています。活動を始めた頃は、不安なことばかりでした。しかし、今ではたくさんの後輩へアドバイスをしたり、一緒に学習支援の方法を考えたりするようになりました。少しずつではありますが、私自身も成長を実感できています。

現在は、7月から参加している、中学1年生のK.Nさんの数学を担当しています。K.Nさんは、学習意欲が低く、知識の定着も低い生徒です。しかし、活発で明るく、毎回の学習に参加しています。

数学科に対して苦手意識が強くあり、考えることを途中で諦めてしまったり、集中力が切れてしまったりすることがあり、表情が曇りがちでした。基礎からしっかりと教えていく必要があるため、モチベーションの維持と学習意欲の向上、知識の定着を目標にして学習支援を行ってきました。

数学科だけでなく、他教科に対しても同じように苦手意識があります。その中でも社会科に対して、どう勉強していけばよいのか分からないということ、K.Nさんから聞きました。そこで、英語科の担当学生と協力し、各授業前半の約5分を使い、テスト対策のためにも、都道府県についての確認を行うことにしました。最初は都道府県名すら分からなかったK.Nさんですが、最近では県庁所在地名なども答えられるようになってきています。その結果、社会科に対してのモチベーションも徐々に上がってき

ているだけでなく、数学科についてもモチベーションが徐々に上がってきています。

上がったモチベーションを維持するためにも、都道府県の確認後に3~5問の計算問題を行っています。正負の数の計算から方程式の計算など、K.Nさんに合った問題を作成しています。例えば、前回の授業で解いた問題や、数字を変えた問題など、なるべく解けるような問題を多く入れることで、徐々に自信を持って答えることができるようになってきました。このやり方で授業を進めてきたことで、以前よりも表情が明るくなり、学習意欲が感じられるようになりました。

K.Nさんとの学習支援を通じて、生徒に対して学習方法を工夫することの大切さを学びました。工夫した教材を使うことだけでなく、会話や表情も工夫することが大切だと感じます。その結果、生徒がよい表情で学習を進めていくことができると、自ずと結果もついてくるのが期待できます。

JIN KANA 学習塾で、他の学生と協力しながら学習を工夫することで、生徒の表情が良くなったことは私の自信に繋がっています。これからも JIN KANA 学習塾の一員として、生徒に合った学習支援を行えるように努力します。

## JIN-KANA 学習塾との出会い

### 英語英文学科 3年 太田滉二

私が JIN-KANA 学習塾に参加させていただくようになってから、約1ヶ月が経ちます。JIN-KANA 学習塾に参加したきっかけは、「長期的」に人のために自分の力が役に立つ活動をしたかったと思ってのことです。「長期的」と言いましたが、個人的にこれまでの学生生活で、アメリカとカンボジアで教育に関する「短期的」なボランティア活動をしてきました。これらの活動を通じて感じたことのひとつに、「教育で結果を残すには、長期的にサポートする必要がある」というものがありました。「もっとやれたなら…」、「せっかく子どもたちと仲良くなれたのに…」と思って活動を終えることがほとんどだったので。そんなことを考え、ボランティア活動を探していた時に、友人の紹介でこの JIN-KANA 学習塾と出会いました。

実際に活動して1ヶ月。やはり思っていた通り、生徒さんの成長を見守るには、長期的な視点で計画を立て、信頼関係を築いていかないと、ちゃんとした結果がついてこないと感じました。JIN-KANA 学習塾では、基本的に一対一で50分間、中学生とボランティア学生で学び合います。継続的に同じ生徒さんと一緒に学習していくのが特徴です。これは、どこの学習ボランティアでも同じことかもしれませんが、私もこのJIN-KANA 学習塾での経験を通じて、同じ生徒さんと長期的に学習サポートに携わることの大切さを身に染みて感じています。JIN-KANA 学習塾には、いろんな生徒さんが通っています。ここでの「いろんな」と言うのは、学習へのモチベーションです。一般的な進学塾ならば、勉強が好きな生徒さんや何か目標があって入塾される子が多いでしょう。しかし、生活困窮家庭の生徒さんが通う JIN-KANA 学習塾はそうとは限りません。モチベーションに関しては、本当に様々です。だからこそ、長期的に一緒に関わり合い、信頼関係を築いて一步一步学び合っていくことがより大切になってくるのだと思っています。

まだ JIN-KANA 学習塾に参加して、1ヶ月と日が浅いですが、失敗や試行錯誤を繰り返しながら、活動に励んでいます。そんな私が、この活動を行う際に肝に銘じていることがあります。それは「生徒は教師を選べない」という言葉です。これは私のゼミの先生から、耳にタコができるほど聞かされた言葉ですが、今ほど、この言葉を見に染みて感じることはありません。これが、教師としての責任感なのだと感じています。まだまだ未熟者ではありますが、責任感と情熱、そして愛を忘れずに、これからも一生懸命、JIN-KANA 学習塾で学ばさせていただこうと思っています。その中で、生徒さんの成長と僕自身の成長が共に実っていければ、これほど嬉しいことはない。そう思います。これからも頑張っていきます。

### 生徒に気づかされること

#### 人間科学科3年 太田健人

私は3年生の後期からこの JIN-KANA 学習塾の活動をしています。最初は何もわからず、どの程度の学習支援を行えばよいか、コミュニケーションを円滑に進めるにはどうしたらよいかわかりませんでし

た。

私が週一回、K.N さんを担当しています。K.N さんはあまり勉強が好きではありません。しかし、「これ、一緒にやってみようよ」と問いかけると少し嫌がりながらも行動してくれる子です。その行動力を無駄にしたいかと思ひ、本人と様々な話をしました。勉強、部活、今日の調子など学習に関係なくとも、とにかく本人の性格などを知ることから始めました。学習では、英語がどの程度わからないのかと一緒に探ることから始め、どのように学習を進めていくのか具体的なプランを立て、本人の意見も聞きながら試行錯誤し、英語を少しでも「楽しい」と思ってもらえるように学習内容を考えています。おかげで、今は学習方法のビジョンが少しずつ見えてきたのではないかと感じています。生徒は、何か1つでもできることがあるととてもうれしそうな表情を見せます。訳すことができた、単語を間違えずに読めた、スペルが書けるようになったなど、些細なことに見えるかもしれないようなことでも、大きな成長であると言えると思うので、そのことによって自信を持ってもらいと感じました。そのためにも、何か1つでもできるようになることがあるのなら、そこを褒めてあげるようにしています。K.N さんができることは限られていますが、自信をつけてもらいたい、1つでも多くの事を分かってもらいたいと思ひながら毎週一緒に学習をしています。テストの成績を上げる事は簡単なことではありません。しかし、K.N さんが成績を上げて喜び合える日が来るように、しっかりとサポートしていきたいと思ひます。その様な日々の中で、特に生徒の事を理解する大切さを学びました。生徒を理解しなければ、何も始まりません。何ができて何ができないのか、何が好きで、普段何をしているのかなど、たとえ世間話のような会話でも、その中には生徒を理解するヒントがいくつもあります。これからも、何気ない会話の1つ1つを大切にしていきたいと思ひます。



## 生徒と共に

### 人間科学科3年 林祐太

私は今年度の4月からJIN-KANA学習塾での活動に参加しています。前期では1人の生徒と深く関わることしかありませんでしたが、今期はより多くの生徒と一緒に活動ができました。様々な生徒と関わるなかで、生徒によって性格・特徴が異なることが改めてわかり、それぞれに合った接し方や、学習方法が大切であるとわかりました。

私が主に担当することが多かったY.Sさんという生徒は中学3年生で高校入試を間近に控えている生徒です。いつも元気にJIN-KANA学習塾に来ているとても明るい生徒ですが、入試が迫ってきていることもあり、勉強に対してストレスを感じているように見えることもあります。そのため、私はその日の彼女のモチベーションに応じて学習を進める速度や、学習する量を臨機応変に変えることを意識するようになりました。このことはこれからの学習の中でも意識していきたいと思っています。また、彼女の自信を失わせてしまうような学習はあまりしたくないと思っています。できない問題が多い日はモチベーションが大きく下がってしまう生徒のため、できると思われる問題を活動のなかに取り入れることによって、彼女のモチベーションを維持しながら活動していこうと思いました。

Y.Sさんは3年1学期の成績よりも、3年2学期の成績が良くなり、本人はとても喜んでいました。また、私が一緒に学習に取り組んだ教科も伸びていたので、私自身も自分のことのように嬉しかったです。今年度の5月に私は初めてY.Sさんの担当になりましたが、その頃よりも彼女は学習に対して意欲的になったように思います。生徒と共にJIN-KANA学習塾で活動し、生徒の成長を間近で見ることができることは、私自身にとっても非常に貴重な経験であり、モチベーションの向上にも繋がります。これからの活動も共に取り組み、彼女の第一志望校合格を目指していきたいです。

私はJIN-KANA学習塾での活動に参加して、生徒との活動以外のところでも私自身の成長に繋がるようなことが多くあると感じています。他の学生の生徒への対応の仕方や接し方を観ること、JIN-KANA学習

塾という組織の運営について考えること、JIN-KANA学習塾を担当して下さっている先生方と話をすることなど、様々なところに自分をより成長させることができるきっかけがあると思います。なので、これからもより多くの視点からJIN-KANA学習塾の活動を見て、私自身の学びとして多くのことを吸収していきたいです。

## わかることの喜び

### 英語英文学科2年 村上夏月

私がJIN-KANA学習塾に参加するようになって5ヶ月が経ちました。1年生の頃やJIN-KANAに入った当初はあまり真剣に教職を目指していたわけではありませんでしたが、JIN-KANAに参加するようになってから最近では本気で教師になりたいと思うようになりました。理由は最近ずっと担当している2名の生徒との関わり合いの中にあります。S.Oさんは英語が得意でいつも私が困るような細かい質問をします。私は質問の答えをその場で答えることはほとんどできず、一度持って帰って調べて次週答えます。また、わからないことは感覚的に覚えるしかないと言ってしまうことが多く、説明も下手でS.Oさんに納得してもらえないような答えはあまり出せませんが、時々とてもわかりやすかったと言って感謝してくれるときがあります。私はとても嬉しく安心しますが、彼女もわかることに喜びを感じているように思います。それは学習をしていく上でとても大切な気持ちであり、彼女がこれからもずっとその気持ちを持ち続けられるように支援していきたいと思っています。一方で、H.Mさんは勉強があまり得意ではなく、中学2年生ですが1年生の初期の基礎的な内容も身につけていません。授業中は寝てしまうことが多く、「なぜ？」と尋ねると「わからないから。」と言うのです。私自身授業がわからなくて寝るという考えがなかったため、「それはダメだ、わからないなら起きて先生の話を聞いていよう。」とやや冷たくはつきりと言ってしまったのですが、その時H.Mさんは心なしか寂しそうな顔をしていたように思います。私は成績が低いのも勉強ができないのもやる気がないからだと思込んでいたのです。しかし何回か話しているうちにやる気がないからやらないのではなく、や

る気はあるけれどわからないが積み重なってやる気をなくしてしまっているのだということに気づきました。そしてそれまで「どうしてやらないの?」「何でできないの?」としか思えていなかったのに、「どうしたらわかってもらえるだろう?」「どうしたら覚えやすいだろう?」と前向きに考えるようになりました。最近ではアルファベットを間違えることが少なくなったり、何回も出てくる単語の意味や発音を覚えられるようになりました。さらに嬉しいことに、自ら英文を作りたいと言ったり、教科書の本文の内容を知りたいと言ったりするようになったのです。今まではこちらがやろうといったものをただこなしていただけだったので大変嬉しい進歩でした。これは以前よりもわかることが増え、わかることの喜びを知ることができたからなのかなと思います。今までテストの点数などは気にしていなかった彼女が次回の目標点を決めたこともその証だと思っています。これからは彼女の「わかる」をもっと増やせるようにサポートし、彼女の気持ちに寄り添っていきたいと思います。

## 生徒が成長するために

### 総合工学プログラム2年 近藤恵都

私がJIN-KANA学習塾に参加し始めてから8ヶ月が経とうとしています。私はこの8ヶ月で多くの生徒と関わってきました。その中で学ぶことは多くありました。特に現在、同じ2学年の生徒2人と数学の学習を進めています。彼女らは理解の仕方も学習の進む速さも違うため、彼女らにあった学習方法を見つける努力をしています。その学習方法を考えることが今一番の課題です。より良い学習方法を見つけるために多くの学生と話すようになりました。みなさんの確かなアドバイスを下さいました。その結果、特にH.Mさんは著しい成長を見ることができました。

H.Mさんは、入塾当初中学1年生の内容がわからないということだったので、正負の計算から一緒に学習を進めていきました。同時に九九が確実に身につけていないことに気がきました。そこでゲーム感覚で覚えられるような教材を準備しました。私と彼女との間では「郵便屋さんゲーム」と言っていて、ポストが描かれた色紙の上に九九の掛け算の部分が

書かれたものを置きます。それに合うように手紙に見立てた答えをポストの横に置いていきます。彼女はこれをとても気に入って、毎回楽しく学習しました。また、繰り返し学習を進めたことで、掛け算の前と後ろはひっくり返しても答えは変わらないという事に彼女は気がつきました。九九以外は全てプリントで学習を進めていきました。彼女は一桁の計算は問題なくできましたが、二桁の計算になると途端に手がとまってしまいました。しかし、制限時間を決めて学習を進めていくことで、集中して取り組むことができました。彼女は学習意欲が高く、難しい問題に対しても一生懸命考え、答えを導き出す姿勢がよく見られました。入塾当初は自分の答えに対し自信がないと言っていましたが、最近では答えを書いた後に自信があるか聞くと、「うん」と答えるようになりました。今では課題としていた九九は、答えがわからないと言うことも間違えることも少なくなりました。

また、漢字の読み書きを苦手としているので、克服するために毎回問題文を読んだり、文章を書いたりすることを多く取り入れました。わからなくて聞いてきた漢字は次回には書けるようになっていくなどの成長を見ることができました。今ではひらがなで書くこともほとんどなくなり、文章力も上がってきたように感じます。

私は彼女との学習を通して、その生徒にあった学習方法の見つけ方を学びました。これからも生徒の性格などを見極め、より充実した学習ができるように他の学生にアドバイスをいただきながら、生徒と一緒に成長していきたいです。

## 相手の気持ちを考える

### 法律学科1年 佐藤郁弥

私は、JIN-KANA学習塾という活動を始めて約二か月がたちました。とても短い期間ではありますが私はそこで多くのことを学びました。学生間での生徒の情報共有の大切さや人に教えることの難しさ。大変なことはとても多いですが、生徒の成長が見られたときの嬉しさはとても言葉では言い表せません。そして私はこの活動で、生徒が自ら考える学習を意識しながら活動を行っています。

私は中学二年生のI.Yさんの学習を見ています。教科は英語です。I.Yさんは自分がやりたいことをはっきりと言いわからないことがあればすぐに質問をしてくるとも向上心の強い生徒です。そんなI.Yさんの考える力をもっと引き出せるように、JIN-KANA 学習塾の活動を続けていきたいと思っています。

しかし、I.Yさんは最初からそうだったわけではありません。担当し始めのころのI.Yさんはとても口数が少ない生徒でした。私はどうすれば心を開いてくれるか、どうすればわからない問題を理解できるかを考えました。そこで意識したのは、学習前の少しの時間や、JIN-KANA 学習塾の途中にあるおやつで時間となるべく多く話してコミュニケーションを多くとることです。学習面では、問題をといて「自分の力でできた」という成功体験をしてもらったので、解けそうな問題を様々な教材から探したり、自分で作ったりしました。もし間違えてしまってもただその間違いを解説するのではなく、なぜこう思ったのかを聞いて、生徒の考えを口に出させること、問題が出来たときにはしっかりと褒めることを意識しました。それらを行った結果少しずつ心を開いてくれて、いつも無表情で口数が少なかったI.Yさんは笑顔が増え、自分から思ったことを話してくれるようになりました。

そしてとても嬉しいことがありました。「JIN-KANA 学習塾で学習したことが授業の時に出てきて発言できました！！」ととても嬉しそうに話してくれたことです。それからは少しずつ自信を持つことができたのか、JIN-KANA 学習塾でいつも授業の最初に行っている単語練習の時、音読の時の声が大きくなったのです。このように生徒の成長を目の当たりにできてとても感動しました。それと同時にやりがいも感じました。

この JIN-KANA 学習塾は普通の授業では体験できないとても貴重な体験ができます。これからも I.Yさんが自信をもって授業で発言したり、テストなどでも自信を持って答えが書けるようにサポートをしていきたいと考えています。そして私もこの活動を通して生徒と共に成長することができればと思っています。

## 共に成長する時間

### 法律学科1年 時田和哉

私は1年の後期から JIN-KANA 学習塾での活動に参加しています。この活動に参加したいと考えた理由は、将来教師になるための経験を少しでも多く積みたいと思ったからです。この JIN-KANA 学習塾に来る生徒は一人一人様々な事情を抱えています。その中で生徒と1対1で学習を進めていくことに対して私は始めたばかりの時、とても不安に感じていました。そこで私はまず生徒の性格を知ろうと思いました。趣味は何か、好きな教科は何か、様々なことを話していく中で生徒との距離を縮めていくことができました。

私が初めて担当したO.Mさんは初対面の人に対しても人見知りをあまりせず、気さくに話しかけてくれる生徒でした。また文武両立を目指していて、とても学習意欲が高いです。そのため、私は生徒自身が問題に取り組む時間を十分に取り、生徒の気づきや疑問を大切にする方法をとることにしました。O.Mさんはたくさんの疑問を抱いてくれて、私はその疑問をひとつずつ生徒と解決していくことにやりがいを感じています。最初にした説明であまり納得してくれないときは、違った方向からのアプローチをしてより生徒が納得してくれるように努めています。O.Mさんはわからなかった問題がわかるようになる私の肩を横から叩いて「もうわかった。次は1人でできる。」と力強く言います。その時の表情はたくましくて、私も刺激を受けています。また、JIN-KANA 学習塾で勉強したことでテストの点数や成績表の評定が少しでも良くなって、生徒が「ねえ。先生みてよ」と自慢げにまた、嬉しそうに報告してくれることが私はとても嬉しくて、このまま生徒の成長をそばで見たいと思いました。だから私はこれから、たとえ生徒自身勉強することが嫌いであっても、私と勉強することは好きになってくれるように工夫を凝らして学習環境を作っていきたいと日々の活動を通じて思いました。

このように、JIN-KANA 学習塾での活動は生徒の学力向上のみならず、学生においても自らを成長させることができる場であると思います。つまり、共に成長しているのだと感じました。だから、生徒のこと

を第一に考え今の自分に何ができるかを検討しなければならぬと思いました。

## 準備の大切さ

### 法律学科1年 永井啓介

私が JIN-KANA 学習塾の学校ボランティアを始めてから、半年以上が経ちました。これまでに何人かの生徒と一緒に学習を進めてきましたが、その中でも自分が一番成長した時間は Y.S さんとの学習の時間でした。

彼女はとても学習意欲が高い生徒で、学校で出された課題はもちろん。自ら学校のワークを進めてきます。JIN-KANA 学習塾の時間に自分で解ききることができなかつた問題について質問を準備してくるほど学習に対して前向きな生徒です。その反面、定期テストになると細かな間違いや計算ミス等と思うようにテストの点数が伸びず、上手くないことが多々ありました。これに合わせて自分の中にも、彼女がこれを克服するためにどのような形で自分が手助けできるのか、ということが自分の中の課題でもありました。そうして何回かの彼女との学習の時間を通して、自分はひとつの結論にたどり着きました。

それは、自分ができる最大限の準備をするということです。今まで自分が準備するものは、その日に学習する分だけの教材だけになってしまいがちでした。しかしそれだと、彼女が自分で学習した際におからなかった所に関する質問や疑問に、彼女にとって分かりやすい手助けをしてあげることができなくなってしまいます。そこで私は、毎回の準備に対する意識を大きく変えました。

その日に使用する教材はもちろん、それに加えて彼女の苦手とする問題・分野に関しての知識をもっと深めた上で学習に取り組むようにしました。さらに、ただ知識を深めるだけではなく、どこでつまづくのだろうか、彼女だったらこの問題に対して質問をするだろうなど生徒のことをきちんと見つめなおした上で準備をすることを心がけました。このように、事前の準備をしっかりと固めておくことで、彼女の中の課題や疑問に臨機応変に対応することが出来るようになりました。

一対一で学習を進めている JIN-KANA 学習塾であるからこそ、自分と一緒に学習を進めていく生徒と向き合って、自分ができる最大限の準備をすることは生徒にとって大きな支えになれるのではないかと、自分なりに答えを出すことができました。自分の固定観念や「いつも通り」にとらわれるのではなく、日々自分なりに答えを出してこれから先も Y.S さんやその他の生徒とも、それぞれの生徒の支えになれるように努力していきたいです。

## JIN-KANA で見えた教師像

### 経済学科1年 小見川恭輔

高校の頃の先生の影響で社会科の教員になりたくて神奈川大学に入学したのだが、JIN-KANA 学習塾に入る前は教職課程を取ったけど何をすればいいかわからず、何となく教職の授業に出て何となくサークル活動に出てアルバイトをしていた毎日で何か自分が教員になるために成長するために努力できるものはないか、いつも模索していた。そんな時、教職の授業中に教授が JIN-KANA 学習塾の紹介をしていた。これだ、と自分の中でそう感じ、入ることにした。しかし入ったばかりの自分は本当に人に教えてあげることができるのだろうかと思ふところ不安のほうが大きかった。でも親切的な先生方、同じく教職課程を取っている JIN-KANA 学習塾の先輩方にさまざまなノウハウを教えて頂き、そして同期とはお互い教えあい充実した日々を送れている。

私は社会科が専門だが JIN-KANA 学習塾では数学が英語が主な為中学数学を担当している。私は中学時代正直数学苦手だったし教えるのは今も不安な面もある。だが、その不安も最近少しずつ無くなっていきつつある。私は今 T.S さんを担当しているのだが、彼も数学が苦手な生徒なのだが、そんな彼と私の中学時代に何か同じものがあるのではないかと、当時の自分と T.S さんだったらどのように教えたならわかりやすいかを考えプリント作成と指導法を考えた。その時に思い付いたのが「教える」のではなく「気付かせる」のがいいのではと思ひ授業に臨んだ。そして授業中に「気付かせる」作戦は成功し、気付いてできるようになっていく T.S さんを見て私はとても嬉しくなりいろんな生

徒を教えていくうちに少しずつ自信に変わりつつある。

教師になるためにはまだまだだがこの活動を通して私は JIN-KANA 学習塾で理想の教師像が少しずつ見えてきた。これからも向上心を持ち JIN-KANA 学習塾で活動していこうと思う。

## 生徒の目線で考えること

### 英語英文学科1年 石川彩乃

私は、今年度の10月から JIN-KANA 学習塾の活動をはじめました。私の将来の夢は、中学校の英語教員になることです。私は、教師としての素質を磨くため、教える事、生徒と共に学ぶことが、いかに大変で難しいかを知るために、この活動に参加しようと決断しました。

私は、A.Aさんという生徒を担当しています。A.Aさんは、英語への苦手意識が強い生徒です。単語は、意味が分かっても発音と言えなかったり、発音はできて今度も、意味がわからなかったりということが毎回の学習で見られます。しかし、私がヒントをだしてあげたりしているうちに、自分で答えを導きだせることができると、とびっきり素敵な笑顔を、私に向けながら答えてくれます。

A.Aさんは毎回 JIN-KANA 学習塾がはじまるまで、学校の英語の宿題に、熱心に取り組んでいます。次回やる範囲の単語を予習したり、学校で出された部分をノートに練習したりしています。私はその姿勢に毎回とても感動しています。しかし、残念ながら A.Aさんはスペルを書いて意味を書くだけで終わってしまい、意味、スペル、発音を一緒に覚えないままになっています。時々、私が「この単語の発音は？」などと聞くと「えーわかんない。」と言われてしまいます。単語、文法の知識を蓄積していくことは、英語を学習する上で、とても重要だと私は考えます。そのため、どうしたら、その3つを結びつけることができるのか、長期的な記憶として定着させることができるのか、その答えを見つけることが、今の私の課題だと思っています。

私は JIN-KANA 学習塾をはじめから、たくさんの事に気が付くことができました。例えば、中学、高校で学んできた英語、つまり自分の中にある英語の

知識を、そのまま中学生にぶつけることはできない、ということです。例えば、can です。can は、「～できる」という意味を中学生で教わります。しかし、高校生になって応用が混ざってくると、cannot で「～のはずがない」といった「～できる」とはかけ離れた意味も勉強するようになります。そのため、中学生のために私たち大学生は、脳を、言ってしまえば中学生の知識にあわせなければいけません。

そこで、私は can に関連した自作プリントを作りました。can の役割をわかりやすく教えるべく、JIN-KANA 学習塾の先輩方から、アドバイスをいただきつつ、試行錯誤しながら作成しました。そのプリントを終えたあとの教科グループの話し合いで、先輩に「A.Aさん今日すごく理解していた表情していたよ!」とやっていただくことができました。

私は JIN-KANA 学習塾に入ってからまだ日も短いし、教職課程を履修している学生としても、知識が不十分ですが、先輩や先生方の助けを借りつつ、将来の夢に近づけるようにこれからも努力していきたいと思います。



## 成長するために必要な要素

### 英語英文学科1年 オカダヒトシ

JIN-KANA 学習塾に参加して半年が経ちました。いまだに慣れずに生徒をどうすれば支援できるかを考え、実行する事の難しさなど先輩の方々から多くのことを学びながら活動を継続しております。

JIN-KANA 学習塾では、生徒を支援しながら教え方を学べる場所と感じています。自分の意見だけではなく、先輩方や先生方に相談し、自分の視野を広げることができる場所でもあります。ここで活動することができる現状に感謝しています。

私は現在、W.K さんという生徒を担当しています。彼の英語を担当して気づいたことがいくつあります。最初の頃は自分から話すことはほとんどなく、大学生が用意したプリントなどを黙々とやる印象でしたがやっていくうちに、分からなかった部分に直面すると頭を触る癖があることに気づきました。初めは頭がかゆいのかと思っていたのですが、解いている部分を確認すると間違っている部分や空欄がある時など「分からない」「習ってない」「思い出さない」内容があると頭を触れることに気づきました。また、先輩からもそれを指摘され、触れる回数を減らすように言われて、今も挑戦しています。また、彼は自分のことについて話したくないのではなく、聞かれない限りは言わないようにしていると考えられます。私の質問に対して彼は素直に答えてくれていたのでそう感じました。そして、信頼している人と一緒だと学習への取り組みや集中力も上がることに気づきました。最初の頃は集中どころかまともに会話することができなかつたので、自分が担当して大丈夫なのか不安になりました。しかし、回数を重ねていくうちに集中力が増していき、だんだんと彼との距離が近づいていると感じました。まだ彼が学習をする際は、自分のやりたいことを聞いてから進めています。聞かない限りは学生の準備をしたものを黙々とこなすので、それでは支援の意味がないと思い、始める前に必ず聞いています。自分から言い出すこともあるので、彼のやりたいことを優先し支援できるように心がけています。主に本文の復習と学校で習っても分からなかった部分を質問してくるので、理解ができるまで時間をかけて使えるようになるまで

説明や問題を解かせるようにしています。また、単語のスペルの間違いが見られますが、文字の順番が違ったり、一文字抜けていたり、発音する時似ている文字にしてしまうようなミスが多く見られ、単語を覚えることが苦手だと思っていたのですが、意味は理解できているので単語のスペルを間違えないように、少しずつですがやっています。英文の入れ替え問題はできている様子でしたが、選択肢が多くなると混乱してしまう傾向があるので、混乱しないように文の意味をよく読むようにアドバイスしています。

W.K さんは勉強に対して関心と意欲が高く自分の知らないことでも習っている事を使って挑みます。彼は自分の分からないことに対しても興味を持つ生徒で多くのことに挑戦して行くと考えられます。私は彼が挑戦していくことを支援し、共に成長できるようにこれからも見守って行きたいと考えています。

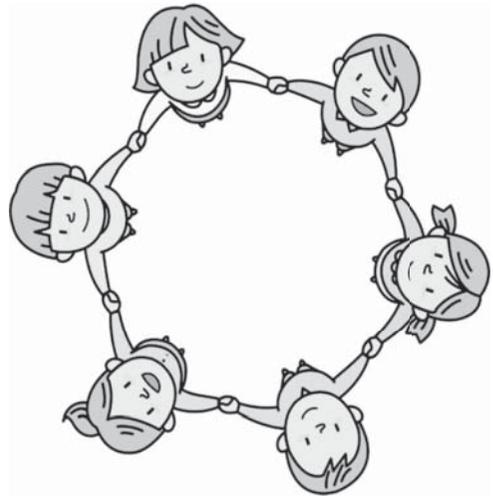
## 生徒から学んだこと

### 英語英文学科1年 水野紗愛

私はこのボランティア活動を始めてから、まだ1ヶ月も経過していません。そして、担当の生徒と一緒に勉強を行ったのも、まだ1回と半時間程度です。しかし、その中でも、このボランティア活動を通して生徒から学んだこと、かかわって感じたことが多くあります。まず、このボランティア活動を始めて、先輩方が生徒一人一人の性格を理解して、学習の方法や接し方を考えているということの日頃から感じています。生徒とどのように勉強していけばいいのか、どうしたら飽きずに、楽しく勉強を行ってくれるのかを考えて、暖かい雰囲気の中で一緒に学習を行っている様子を見てきました。そんな先輩方を尊敬し、見習っていきたく強く思いました。

私は、ちょうど私と同じくらいの時期に入塾した、O.M さんを担当しています。O.M さんとの学習を通して、大きく分けて彼女の二つの長所を知ることができました。一つ目は、思いや目標を言葉にすることです。O.M さんは、思ったことをはっきりと言ってくれる生徒です。「授業中に発言をしたい。」そのために、「予習をやり、宿題をしっかりと出したい。」という思いや、「今日はこの範囲の宿題をやる。」など、

こちらから何か聞く前に、自分の目標や考えを口に出してくれませんか。そうしてくれることで、何をやりたいか分かるので、私も一緒に頑張りたい、応援したいという気持ちにさせられています。二つ目に、ひたむきに頑張る姿勢です。O.Mさんは単語など分からないことがあっても、そのまま教えてもらうことを嫌い、ヒントを出すと自分の知っている単語や意味をどんどん言ってくれます。その積極性と、ただ教えてもらうより自分で答えを見つけたいという思いが、学習する上で大切なことだと改めて感じました。そのためには、私自身、自分の単語力や英語に対する知識を深め、広げていくことが大切だと思います。そして、上手なヒントを出して、O.Mさんのやる気を引き出せるようにしたいです。これから一緒に勉強していく中で、O.Mさんの長所を最大限に引き出せるように、頑張っていきたいです。そして、これからも生徒とかかわる中で初心を忘れず、多くのことを学んでいきたいと思っています。





**発行** 神大ユース・サポート・プロジェクト (JYSP)

TEL : 045-481-5661 (内線 4352)

FAX : 045-413-4154

E-mail : [jyssp-jimukyoku@kanagawa-u.ac.jp](mailto:jyssp-jimukyoku@kanagawa-u.ac.jp)

URL : [http://www.kanagawau.ac.jp/teacher\\_training\\_course/jyssp/](http://www.kanagawau.ac.jp/teacher_training_course/jyssp/)